

少子社会における養育力の背景とその育成に関する研究(3) — 高校生の性役割観と将来観に関する調査 —

母子保健研究部 齋藤幸子
客員研究員 宮原 忍
目白大学 内山絢子
嘱託研究員 近藤洋子 (玉川大学)
人間総合科学大学 星山佳治
国立社会保障・人口問題研究所 佐藤龍三郎

要 約

次世代の養育力育成に有効な方策を提示するための資料収集を目的に、高校2年生男女を対象に質問紙調査を実施し、男子94件、女子144件について分析した。男性性・女性性の高い群は養育力があるとの仮説などを検証した。主な結果は以下の通りである。

男性性・女性性の得点では性差がなく、男女ともに男性性得点が女性性得点に比べ高かった。

男性性・女性性がともに高い群は、EPSIの下位尺度ジェネラティビティ(生殖性、世代性)や肯定的子育て観・子ども観などの得点が、他群に比べて高く、養育力が高いと言えた。その背景として、他群に比べてより多く、親からの世話および価値観の伝承を受けていた。

平等主義的性役割態度は女子の得点が男子に比べ高かった。養育力との関連は認められず、結婚志向との間に負の相関が認められた。

ライフスキルの習得について、高校生は親および学校いずれからも学びたいと考えていた。

以上から、仮説が支持され、男性性・女性性のいずれもバランスのとれた発達が望ましいことが示唆された。しかし、アンドロジニー(両性具有)については議論のあるところなので、更に慎重に検証を進める必要がある。平等主義的性役割観の性差は、男女共同参画社会に向けた青年への支援として注目されるべきである。家庭と学校が連携・役割分担をして次世代の育成策が充実されることがのぞまれる。

キーワード：少子化、ジェネラティビティ、性役割観、男性性、女性性、EPSI

Generativity and Decreased Fertility of Japanese Society: A Survey on the High-School Students' Gender-role Attitude and the Generativity

Sachiko SAITO, Shinobu MIYAHARA, Yoko KONDO,
Yoshiharu HOSHIYAMA, Ayako UCHIYAMA, Ryuzaburo SATO

Abstract : To explore a policy against the decreased fertility in Japan, relations between generativity and the following factors were examined: gender-role attitude, masculinity, femininity, consciousness to child-rearing, behaviors relating to generativity and etc. A sample of 238 of high-school students, 94 males and 144 females, was analyzed.

There was no difference in the scores of masculinity and femininity between the males and females. The average score in masculinity was higher than that of femininity in cases of both sexes.

Compared with people who had low scores in both masculinity and femininity, the androgynous people (who had high scores in both masculinity and femininity) showed high average score in some scales of generativity, such as Erikson Psychosocial Stage Inventory (EPSI), consciousness to child and consciousness to child-rearing. In their childhood, they were well taken care of by their parents and sense of values was succeeded from their parents.

The gender-role attitude score of females was significantly higher than that of males. The score was not associated with generativity, and negatively associated with their intention of marriage.

The high school students wanted to learn the life skills from both parents and the school.

It must be noticed that the cooperation of school and parents is necessary to support the students' transition to adult.

Keywords : generativity, decreased fertility, gender-role attitude, masculinity, femininity, EPSI

I 緒言

少子社会に対応した養育力の育成を目標として3年計画の調査研究を実施した。本稿はその最終年次の報告である。本テーマへの取り組みに先立ち、平成13年度から、わが国の少子化および児童・家庭を巡るさまざまな問題について、世代の再生産および個人や社会の養育力が不全な状態と捉え、継続的に調査を実施した。一連の研究で養育力とは、エリクソンの成人期の課題“ジェネラティビティ”(生殖性、世代性)を上位概念とし、「子孫を生み出すこと、生産性、創造性」を包含する概念としている¹⁸⁾。これまでに、個人の養育力を表す肯定的育児観、子ども観、世代継承観、SOC(首尾一貫性感覚)、対人スキルなどが人格の成熟と正の関連があることを明らかにし、次世代の養育力育成には、個人の人格発達を促し、社会のジェネラティビティを育むことが肝要であることを示した。本研究は、これに続く少子研究の一環として、ジェネラティビティを中核概念として具体的な養育力育成策の提示をめざすものである。

初年次には、養育力の一側面としてワーク・ライフ・バランス感覚、人格成熟の背景としての大人観を調べ、2年次においてはこれにジェネラティビティ行動を加え、大学生からその親の世代までを対象に調査を実施した。その結果、大人の自覚の有無と養育力の関連が認められ、あらためて成人へ移行期にある青年の意識に注目する必要があると考えられた。

また、初年度に実施した調査においては¹⁾、大学生の女子が既に乳幼児の親と同程度の育児負担感を持ち、育児負担感が男子大学生に比べて高いという結果が得られた。2年次(平成19年度)に実施した就労している20代・30代男女対象の調査においては²⁾、子どもの有無や婚姻形態による比較の結果、子どもがいない者や未婚の方が、育児の犠牲感や負担感を強く認識している傾向であった。これらのことは「子ども・子育て応援プラン」(平成16年12月)の重点課題「生命の大切さ家庭の役割などについての理解」において、「多くの若者が子育てに肯定的なイメージを持てる」ことが目標となっていることに照らして、改善の余地があると言えた。

女子大学生など子どもを持っていない人の持つ育児負担感、育児の内容をある程度承知しているからこそ認識し、更に育児を自らの仕事と捉えていることが一因と考えられ、性役割観との関連が予測された。従って、養育力との関連において、全体としての人格の成熟度のみならず、一側面としての男性性・女性性、性役割観などの発達を調べることに意味があると考えられた。それによって、養育力について、高い低いだけではないその質的内容を検討することも可能となろう。本年は、高校生を対象に調査を実施し、過去の調査結果とあわせて、次世代の養育力育成についての課題を総合的に検討した。

II 研究方法

1. 調査の対象と方法：都内A高等学校において、高校2年生255名を対象にアンケートを実施した。集団調査法により回答を求め、調査票はその場で回収した。

2. 調査時期：2009年3月であった。

3. 調査項目：将来像(結婚、家庭、仕事、ワーク・ライフ・バランス感覚)、子ども観、子育て観、女性性・男性性、性役割観、人格の成熟度、大人観、子どもの頃の親の接し方、現在大人から教えてもらいたいこと、などであった。詳細は稿末の調査票を参照されたい。

使用した主なスケールは以下の通りである。1)と2)が新規導入設問で、3)と4)は前回から使用している。

1) 平等主義的性役割態度スケール短縮版(鈴木, 1994)³⁾ 15項目を使用した。ダブルバーレル1項目を分割し16項目とした。1=ぜんぜんそう思わない~5=まったくその通りだと思う、の5件法。得点が高いほど性役割に対して平等主義的であり、低いほど伝統主義的であると判定される。16項目中12項目が逆転項目である。本文中では、「平等性役割態度」と記す。

2) M-H-F scale(伊藤, 1978)⁴⁾より、Masculinity(男性性)10項目、Femininity(女性性)10項目の計20項目を使用。0=全く重要でない~6=非常に重要である、の7件法。男性性、女性性を自分にとって重要と捉えているか自己評価を測定した。本文中では、「男性性・女性性」と記す。

3) EPSI(エプサイ心理社会的段階目録検査)⁵⁾より、同一性、親密性、生殖性の各7項目計21項目を使用。0=まったく当てはまらない~4=とてもよく当てはまる、の5件法。人格成熟度の指標とした。

4) ジェネラティビティ行動: Generative Behavior Checklist (GBC)^{6) 7)}を参考に作成した。各行為を過去2ヶ月間の間に、0=1度も行なわなかった、1=1回行った、2=2回以上行った、の3件法。15項目。

4. 仮説：性役割観、男性性・女性性とEPSI、ジェネラティビティ行動は関連があり、男性性・女性性の高い群は養育力があることを検証する。

5. 分析方法：平等性役割態度、男性性・女性性、EPSIの項目すべてにおいて欠損値のない、年齢16~18歳のみを有効回答とし、238件について分析した。はじめに、性別クロス集計により性差を検討し、人格の成熟度(EPSI)、平等性役割態度、女性性・男性性の相関、および他項目との相関を検討後(Spearmanの順位相関係数)、男性性・女性性それぞれの高低によって区分した4群についてグループ間の差を検討した。有意差検定はWilcoxon, またはKruskal-Wallisの順位和検定で行った。有意判定の危険率0.05以下を有意差ありとした。

6. 倫理的配慮：回答は強制ではなく、調査趣旨に同意する場合のみに限定して求めた。アンケート用紙は無記名で、プライバシーの守秘を配慮する方法で回収した。調査内容は日本子ども家庭総合研究所倫理委員会の承認を得た。

Ⅲ 結果

1. 対象のプロフィール

調査対象とした高校は都内東部の区で商業地域に位置していた。大半の生徒が大学に進学する進学校といえる。有効回答は、男子 94 名、女子 144 名の計 238 名から得られた。家族の状況は、父がいない 12.2%、父別居（単身赴任含む）7.6%、母がいない 1.3%、母別居 0.8%であった。きょうだいのいない一人っ子は 10.5%、祖父母の同居は 14.3%であった。

2. 性別集計

1) 自分の将来について (Q8~12)

高校卒業後の進路は、大学が男子 91.5%・女子 73.6%、専門・専修学校が男子 7.4%・女子 13.2%と、ほとんどが進学を希望、就職希望は女子の 2.1%のみであった。

将来つきたい仕事が決まっていたのは、男子 53.2%・女子 59.7%で、その職種は専門的・技術的職業が 62.6%で第 1 位であり、他にサービス業 18%、事務職 7%などであった。

将来の結婚については、「絶対したい」男子 44.7%・女子 43.8%、「なるべくしたい」男子 35.1%・女子 39.6%であった（表 1）。将来自分の子どもを持つことについては、「絶対欲しい」男子 37.2%・女子 41.0%、「欲しい」46.8%・女子 45.1%であった。全体で、約 80%に結婚の意志があり、85%が、「子どもが欲しい」としていた（表 2）。

20 年後、対象が 30 代後半になった時の暮らしの予想については、「共働きで子どもがいる」が最も多く男子 42.6%・女子 54.2%、次いで「夫が働き、妻は専業主婦で子どもがいる」男子 34%・女子 33.3%、「未婚で一人暮らし」男子 10.6%・女子 4.2%などとなっていた。全体で 83.2%が結婚して子どもがいると答えていた。そのうち約 6 割が共働きとしていた（表 3）。

育児休業法に関する知識の設問では、「知っている」とした割合は「男でも女でも育児休業することができる」が最も高く、全体で 55%であり、男子 45.7%・女子 61.1%と女子が有意に高かった。次いで「子どもが 1 歳になるまでの間育児休業することができる」が全体で 45%であり、男子 36.2%・女子 50.7%と同じく女子が有意に高かった。その他の項目の回答率は 7.1~21%と低いが、男子の「知っている」とした割合が女子より高い傾向が見られた（表 4）。

将来のワーク・ライフ・バランスに関する 15 項目で

は、「家族や友人、恋人と過ごす時間がとれる」など、ほとんどの項目で男女とも 80%以上が、「重要である」または「まあ重要である」と答えていた。80%に満たなかった項目は「高齢者が希望に応じて継続就業できる」「地域・社会活動に参加できる」であり、前者は性差がなく、後者は男子 67%・女子 48.6%と女子の割合が低かった。

「1 重要でない」~「4 重要である」を 4 件法の得点として検定を行った結果は、「地域・社会活動に参加できる」「時間を気にせず、思う存分仕事に打ち込める」「家族や友人、恋人と過ごす時間がとれる」で男子の得点が有意に高く、「女性が出産・育児などの影響なく継続就業できる」で女子の得点が有意に高かった（表 5）。

2) 子育て観・子ども観 (Q13、14)

子育て観は、前回の調査項目で「親は~」としていた項目を「母親は~」「父親は~」のように別項目とし、子育ての社会的価値観を追加し、20 項目とした。「1 そうは思わない」~「4 そう思う」の 4 件法の得点で上位は、男子 1 位が「8. 子育てにはお金がかかるが、やむをえない」3.54（女子は 2 位 3.58）、女子の 1 位は「11. 子育てには息抜きやリフレッシュが必要である」3.67（男子は 7 位 3.24）であった。男女とも 3 位は「20. 自分の次の世代には、より幸福な生活を送ってほしい」であり、世代継承的な価値観が認められた。

性差が認められた項目は 7 項目あり、うち男子の得点が有意に高かった項目は「父親は子どものために自分の個性や生き方を犠牲にするのは当然である」「子育てすることにより、自分の自由な時間が減ってもかまわない」「夫婦は子どもを持って初めて社会的に認められる」「子育てで次の社会をになう世代をつくりたい」で、反対に女子の得点が高かった項目は「子育ては、心理的・肉体的負担が大きい」「子育ての大変さを配偶者や周りの人にわかってもらえないのは問題だ」「子育てには息抜きやリフレッシュが必要だ」となっていた。男子学生は子育てを社会的責任ととらえる傾向があり、女子は男子より育児に関して負担感が強い傾向が認められた。（表 6）。

子ども観として、子どもの存在価値 10 項目について「1 そうは思わない」~「4 そう思う」の 4 件法回答を求めた結果、明るさ、活気、喜びなどその存在自体に価値を見いだす項目（カテゴリー 1~6）は 3.0 以上、家の存続や老後のため（カテゴリー 7~10）、3.0 未満と相対的に後者が低かった。性差がみられた項目は、「一家の働き手として必要」「自分の夢や志を託す後継者」で、いずれも男子の得点が有意に高かった。男子は女子に比べて、伝統的子ども観を持つ傾向が認められた（表 7）。

3) 性役割観 (Q15、16)

平等性役割態度は 16 項目中 12 項目が逆転項目であり、逆転させて積算した得点が高いほど平等主義的性役割観を持つとされている。16 項目合計の平均得点は男子 49.6・女子 56.5 で、女子が有意に高いことが先行研究と同傾向であった³⁾。下位項目では 16 項目中 11 項目で女

子の得点が有意に高かった(表8)。

男性性・女性性の各10項目それぞれの平均得点は、男性性：男子46.0・女子45.1、女性性：男子37.8・女子36.3で、いずれも性差が認められず、男女ともに男性性得点が女性性得点より高かった。男性性が女性性を上回る点は伊藤⁴⁾の報告と一致するが、男性性と女性性いずれも性差がなかった点は異なっている。下位項目では、男性性の「指導力のある」「大胆な」「決断力のある」で男子の得点が有意に高かった。女性性では、「色気のある」「静かな」「繊細な」で男子の得点が、「愛嬌のある」で女子の得点が有意に高かった(表9-1、9-2)。

4) ジェネラティビティ(Q17、18)

人格成熟の指標としたEPSI 21項目の合計得点の平均値は、男子42.5・女子44.6で有意な差はなかった。下位項目においては、同一性と親密性で女子の得点が有意に高かった(表10)。昨年度の調査では、働く20~30代の男性47.4・女性46.5であったので高校生の方が低く、EPSIは年齢と正の相関があった過去の結果と同傾向であった。

ジェネラティビティ行動では、15項目それぞれの行為を過去2ヶ月間に行った頻度を3件法で回答を求めた。合計得点は、男子9.31・女子11.57で女子が有意に高かった。下位項目では、「誰かの個人的な話に耳を傾けた」「誰かに自分の幼い頃の話をした」「誰かのために、何かを作ってあげた」「新しい技術を学んだ」「過去の経験を生かして誰かに助言した」で女子の得点が有意に高かった(表11)。昨年度の調査では、働く20~30代の男性11.7・女性12.4と高校生の方が男女ともに低い値を示していた。

5) 大人観(Q19~24)

「一人前の大人になる」とはどういうことだと思うか14項目をあげ「1重要でない」~「4重要である」の4件法で回答を求めた。「責任ある行動がとれる」の得点が最も高く、男子3.74・女子3.9で、女子が有意に高かった。次いで、「社会的常識が身につく」男子3.65・女子3.78、「判断力・決断力がつく」男子3.71・女子3.76などであった。相対的に得点が低かった項目は「家族ができる(結婚する・子どもが生まれる)」男子3.02・女子2.81、「社会貢献する」男子3.15・女子3.26「自分より年下の面倒を見る」男子3.37・女子3.11であった。性差は上記以外に、「自分以外の人を経済的に養うことができる」「年下の面倒を見る」でもみられ、男子の得点が高かった(表12)。前回、前々回調査では質問形式が異なり3つ選択で尋ねたが、本年の4件法においても結果はほぼ同傾向が見られ、「責任ある行動」が上位で、「家族が出来る」など、ジェネラティビティ関連項目の順位は下位となっていた。

未熟な大人が増えている原因について、一項目の選択を求めた結果、1位は「家庭の教育機能が低下しているから」20.6%で、男女の差はなかった。次いで「親が、

青年期以降の子どもを大人として扱わないから」19.3%であったが、男子12.8%・女子23.6%と差があり、女子では1位であった。3位は「若者に大人になることはどうということかのイメージが備わっていないから」男子17%・女子14.6%であった。

その他、女子に比べて男子の割合が高かった項目は「若者が大人になりたくないと思っているからである」男子12.8%・女子5.6%であった。全体の順位としては、家庭の問題の次に若者自身の意識の問題があげられたが、女子は前者を、男子は後者をより多く選択する傾向が認められた(表13)。この項目は前回、複数回答と質問形式が異なっていたが、家庭責任を問う点では同傾向であった。

現在における父母の高校生への接し方では、「時々大人扱い」が全体で父51.3%・母55.9%で最も多く、性差はなかった。「いつも大人扱い」では性差が認められ、父親の接し方では「いつも大人扱い」が男子20.2%に対して女子は5.6%と少なく(表14-1)、母親の接し方でも、男子13.8%に対して女子は8.3%と少なかった(表14-2)。反対に、「まだ大人として扱ってくれない」は、父母ともに、女子の選択率が高かった。女子は男子に比べて、親が大人として接する割合が低く、この傾向は初年度調査の大学生の場合と同様であった。

自己評価による大人度は、最小値0、最大値120、中央値および最頻値50、平均値は男子51.9・女子47.5で、有意差は認められなかった(表15)。

法的に18歳成人になることについては、「適切だと思う」男子42.6%・女子25.7%で男子の方が肯定的であった。

6) 親から受けた世話と価値観の継承(Q25~27)

父母との関わりを知る目的で設問した問25~27は内山による調査項目を使用した⁸⁾。各項目「1まったくしてくれなかった」~「4よくしてくれた」の4件法であった。「幼児期や小学生の頃親がしてくれたこと」の合計得点をみると、父については、男子20.9・女子22.1で差がなく、母では男子22.5・女子24.3と女子が有意に高かった。下位項目でも、女子では男子に比べて得点が高い項目が多く、「いろいろなところへ連れて行ってくれた」など、父からの2項目、母からの5項目で有意に得点が高かった(表16-1、16-2)。親からの世話行為は、女子が男子に比べて多く受けており、内山による中学生対象調査と同傾向であった⁸⁾。

「成長過程で親から言われたこと」についての設問は、日常生活における親から子への価値観の伝承を知ることができる設問であり、「1全くいわれなかった」~「4よく言われた」の4件法であった。合計得点は男子76.0・女子72.1で、男子が有意に高かった。下位項目でも、「勉強しなさい」「目上の人を尊敬する」「人に迷惑をかけない」などの10項目で男子が有意に高かった(表17)。

上記から、女子は親から実際の世話を受け、男子は言

業で伝えられることが多い傾向が認められた。

7) 大人から教えてもらいたいこと (Q28)

将来の役に立つと思われる事柄について、いわばライフスキルに関することであるが、誰から教えてもらいたいのか、「どちらかと言えば学校」「どちらかといえば親」「どちらも同じ位」「どちらでもない」の4つの選択肢から1つの回答を求めた。

「どちらかといえば学校」と答えた割合が最も高かった項目は「仕事の選び方」男子52.1%・女子32.6%(女子は、学校と親「同じ位」も同率32.6%)、「政治や経済社会のこと」男子51.1%・女子43.8%、「性や身体のこと」男子44.7%・女子35.4%であった。以上は男女ともに学校を1位した項目であるが、男子の選択率が女子より高かった。

男女ともに「どちらかといえば親」とした割合が高かった項目は「家事や育児」男子58.5%・女子77.8%、「お金や財産の管理」男子54.3%・女子70.1%であった。親については、女子の選択率が男子より高かった。

男女で異なる傾向が見られた項目は、「年金や保険など社会保障制度」で、男子は「学校」が1位で44.7%、女子は「親」が1位で44.4%と分かれた。「趣味や余暇の過ごし方」では女子は「どちらでもない」の回答が多く43.8%であったが、男子は4つの選択肢に意見が分かれた。「異性とのつき合い方」でも女子は「どちらでもない」が41%と最も多かったが、男子は「どちらでもない」「学校」「親」に意見が分かれた。

ライフスキル取得については、男子に「学校」と答えた割合が高く、女子は「親」や、「どちらでもない」と答えた割合が高い傾向が認められた(表18)。

3. 性役割観と養育力に関する項目間の相関

性役割観(平等性役割、男性性、女性性)と養育力(EPSI、結婚希望、子ども願望、ジェネラティブティ行動)の相関を全体と男子・女子別に表19に示した。高い相関が認められたのは、子ども願望 vs. 結婚希望と、男性性 vs. 女性性の2組のみで、全体・男子・女子いずれも有意であった。全体ではこれ以外に相関係数が0.3を越える組み合わせは、認められず相関が高いとはいえなかった。しかし、男女別に算出すると、男子では0.3~0.5の中程度の相関が認められ、有意な相関は表中で14か所であったのに対して、女子では5カ所のみであった。前出の比較的高い相関の2組以外で検討すると、男子の平等性役割態度は、vs. 結婚希望-0.273, vs. 男性性-0.241, vs. 女性性-0.424で、有意な負の相関があった。同じく男子のEPSIは、vs. ジェネラティブティ行動0.303, vs. 結婚希望0.305, vs. 子ども願望0.352, vs. 男性性0.236, vs. 女性性0.261で有意な正の相関があった。更に女性性・男性性がそれぞれ結婚希望・子ども願望との間で有意な正の相関が見られた。これに対して、女子は平等性役割態度 vs. 結婚希望が-0.202, 女性性 vs. 結婚希望が0.180,

ジェネラティブティ行動 vs. 子ども願望0.204で有意という結果であった。

以上の相関から言えることは、男性性・女性性・EPSIは男子においてのみ、養育力にプラスの効果がみとめられたが、平等性役割態度は男女ともに、養育力にプラスの効果があるとは考えられなかった。また、男子の女性性は、結婚希望と0.419・子ども願望と0.380の正の関連、平等性役割態度には-0.425の負の関連があることが注目されよう。結婚希望は男女ともに平等性役割態度と負の相関が認められた。

そこで、結婚希望(結婚志向の強さ)別に、「絶対したい」「なるべくしたい」「どちらともいえない」および「あまり結婚したくない」と「絶対したくない」を合わせた群(以下「したくない群」と称す)の4群間で平等性役割態度得点を比較したところ、男女ともに有意な差が認められた。「したくない群」の平均得点は男子57.8・女子64.1で、「絶対したい群」の男子46.5・女子54.7に比べて高く、対比較(Scheffe)検定では女子で有意な差が認められた。(図1-1)

同様に、結婚希望別に男性性・女性性の平均得点を比較すると、それぞれ女子には差はなく、男子で差が認められた。男子では、男性性において、「絶対したい群」49.8が、「なるべくしたい」41.9に比べて有意に高かった(図1-2)。同じく男子の女性性においては得点差が大きく、「絶対結婚したい」群は43.2で、「なるべくしたい」群34.8と「したくない」群20.4に比べて有意に高かった(図1-3)。

4. 男性性・女性性による分析

前項の相関係数の検討を踏まえ、男性性と女性性を説明変数として分析することとした。全体の平均値は男性性45.9・女性性36.8、中央値は、男性性46・女性性36であった。中央値で4分する形で、男性性と女性性の得点がいずれも中央値以上を[M F 高群]、いずれも中央値未満を[M F 低群]、男性性が中央値以上で、女性性が中央値未満を[M 高 F 低群]、男性性が中央値未満で女性性が中央値以上を[M 低 F 高群]とした。この4群間で、平等性役割態度、EPSI、ジェネラティブティ行動について平均得点を比較した結果、平等性役割態度で有意な差が認められた(図2-1)。平等性役割態度は、[M 高 F 低群]が58.2と最も高く、[MF 高群]50.2、[M 低 F 高群]52.6との対比較で有意な差が認められた。EPSI21項目合計とジェネラティブティ行動合計では、差が認められなかった。

さらに、[M 高 F 低群]女子と[M 低 F 高群]男子とを入れ替え、自分の性の得点が高く、反対の性の得点は低い群を[自分の性高い群]、自分と反対の性の得点が高く、自分の性の得点が高い群を[反対の性高い群]とした(表20)。

この4群間で、平等性役割態度、EPSI、ジェネラティ

ビティ行動について平均得点を比較した結果、平等性役割態度と EPSI で有意な差が認められた (図 2-2)。平等性役割態度の得点で [MF 高群] は 50.2 と [反対の性高い群] 56.0 に比べて有意に低かった。EPSI 得点では、[MF 高群] は 46.7 と、[自分の性高い群] 40.8 に比べ有意に高かった。ジェネラティブティ行動では差が認められなかった。

次に他の設問項目について、[MF 高群] 男子 35 名・女子 37 名、[MF 低群] 男子 29 名・女子 52 名、[自分の性高い群] 男子 14 名・女子 30 名、[反対の性高い群] 男子 16 名・女子 25 名の 4 群間で、比較した結果を図 3~9 に示し、5%以下で有意差ありを*で表した。

1) 子育て観

20 項目中、「子育ては楽しい」など 14 項目で有意な差があり、[MF 高群] の得点が高群に比べ高い、あるいは、[MF 低群] の得点が高群に比べ低い傾向が認められた (図 3)。

2) 子ども観

10 項目中 8 項目で有意な差が認められ、8 項目すべての項目で [MF 高群] の得点が高群に最も高く、[MF 低群] の得点は低かった (図 4)。

3) 平等性役割態度では、16 項目中 9 項目で差が認められたが、その内容は一律ではなかった。全体としては [MF 高群] の得点が高群に最も低い項目が多いが、「8 家事は男女の共同作業となるべき」は [MF 高群] の得点が高群に最も高かった。「13 女性は、妻であり母であることと同じ位、仕事も大事」は「反対の性の得点が高い群」の得点が高群に最も高かった (図 5)。合計得点は図 2-2 に示した通り [MF 高群] の得点が高群に比べて低かった。

4) EPSI の下位尺度では、生殖性 (ジェネラティブティ) で有意な差が認められ [MF 高群] 14.2、[MF 低群] 12.6、[自分の性高い群] 11.6、[反対の性高い群] 12.8 で、[MF 高群] の得点が高群に比べて高かった (図 6)。

5) ジェネラティブティ行動では、「リーダー的な立場に選ばれた」のみで有意差が認められ、[MF 高群] と [自分の性高い群] の得点が高群に比べて高かった (図 7)。

6) 一人前の大人として重要なことでは、すべての項目で有意な差が認められ、[MF 高群] の得点が高群に比べて高かった (図 8)。

7) 父母の現在の高校生への接し方では、「いつも大人として扱う」割合が、[MF 高群] が父母共に高かった。

8) 高校生の自己評価による大人度は有意な差は認められなかった。

9) 幼い頃の父母の関わりは、すべての項目で「MF 高群」の得点が高く、7 項目中父は 4 項目、母は 2 項目で有意な差が認められた (図 9-1, 9-2)。

10) 親から言われたこととして設問した価値観の伝承では、24 項目中 20 項目で有意な差が認められ、「MF 高群」の得点が高く、「MF 低群」の得点が低い傾向が認められた (図 10)。

5. アンケートの教育的効果

今回、アンケートに関する意見の自由記述回答は 25 件と少なく、肯定意見 8 件、否定的意見 12 件、その他の意見 1 件、アンケートとの関連不明 4 件であった。否定意見は「長い」「むずかしい」「やる意味がわからない」「高校生の答える内容でない」「セクハラ質問、気持ち悪い」などであり、何らかの形で疑問に対する回答を行いたい。肯定意見は以下の通りであり、一部の生徒には自分や周囲のこと、将来などを考えるきっかけとなる効果があったことが確認された。

<肯定意見>

- ・自分や親、まわりの人たちのことについてよく考え直すことができました。
 - ・このアンケートをした後、自分について少し考えるきっかけになったと思う。自分が将来どうなるかわからないけど、なにごとにも頑張れる人でありたい。家事のことにしても、仕事にしても。このアンケートはそんなことを考えさせてくれてよかったです。
 - ・将来のことをよく考えなきゃなあと思った。
 - ・設問の一つ一つがよく考えてあると思いました。
 - ・私たちが答えたアンケートが次世代がよくなるために少しでも役に立ったら嬉しい。
 - ・大人に向かうという意味を考え、混乱する時期を精密に調査することで、その時代の青年の心理傾向を大人 (政治家・教師・心理学者等) に知ってもらえる事は、今にも未来にも非常に重要な事だと思います。
 - ・良かったです。
- #### <その他の意見>
- ・昔はたくさん将来の夢があったが、親に現実的な話をされるうちになくなったので、自分の子はそうなってほしくない。

IV 考察

3 年計画 3 年次の本年は高校生に注目し、性役割観と養育力 (ジェネラティブティ) との関連を調べる目的で調査を実施した。調査の内容は多岐に亘ったが、本稿では、性別集計結果、および男性性と女性性の高低により分けられた 4 群別の集計結果を報告した。以下では、性役割観、男性性・女性性を中心に考察し、3 年計画の最終年として総括する。

1. 性役割観と養育力

性役割観については、社会心理、青年心理、女性学、ジェンダー心理などさまざまな分野のアプローチがなされており、歴史的に見ると、主に生物学的性差の検討から行動・態度の研究を経て、性役割という概念が 1970 年代から出現したとされている。性役割パーソナリティ・スケールについては、男性的か女性的かの一次元で捉えられていた段階から、それぞれ独立した 2 次元で測られようになり、男性性と女性性をあわせもつアンドロ

ジニーの概念 (Bem, S. L.) が生まれた経緯がある。その後更に検証され、男性でも女性でもない中立的な価値をみとめる3次元の理論が出現した^{9) 10) 11) 12)}。

今回は、伊藤による、女性性・男性性・人間性の3次元のM-H-F scaleから、女性性、男性性を使用し⁴⁾、養育力を示す他項目との関連をみることにした。柏木によれば、性役割は3つのレベルすなわち性役割行動、性役割観、性役割同一性に分けて整理されているが⁹⁾、今回の調査は、性役割観つまり価値観を調べることを目的とした。

その結果、男性性・女性性の各合計得点は、男女ともに男性性が女性性より高いという先行研究¹⁰⁾と一致する結果であった。この女性における男性性の高まりが、社会的な期待と異なるズレ discrepancy が問題とされており、今日的に重要な観点であるが、今回は自己評価のみ回答を求めたので、自己評価による高低4群の比較を行った。その結果、男性性・女性性いずれも高い群 (MF高群) いわゆるアンドロジニー・タイプは、肯定的な育児観・子ども観を持ち、EPSIのジェネラティビティ (生殖性・世代性) が高く、養育力が高いと言えた。すなわち仮説は支持された。またMF高群は、大人観の各項目の選択率が高いなど、成熟度が伺えた。アントロジニーは適応的で優れたパーソナリティ特性を持つとされているので、予測されたとおりの結果と言える。

しかしアントロジニーについては、必ずしも当初期待された通りでない結果も報告され、Bem自身およびその他の研究者によって検証され、性役割観に関してはさらなる進展がみられている¹²⁾。本報告は、基礎的な分析に終わったが、ジェネラティビティと性役割観についての報告は他に見当たらず、今後解明していく必要があると考える。

平等性役割態度とEPSIの関連は認められず、むしろ平等性役割態度の得点が高い群は、結婚に対して消極的という傾向がみられた。その意味するところは、平等主義的性役割態度をもつ高校生からみえる現在の結婚は、平等主義に則っていないものと映っていると推察した。

また、平等性役割態度においては、多くの項目および総合得点で女子が高いという明確な違いが認められた。このような価値観の性差は他の項目でも見られ、以下で検討することとする。

2. 高校生の将来観

1) 結婚観・家庭観

将来の結婚や家庭のイメージについては、男女間で顕著な差はみられなかった。男女ともに約8割が結婚を希望し、8割以上が子どもを持つことを希望しており、21世紀成年人者縦断調査の結果 (第1回; 平成14年実施, 対象20~24歳) の結婚の意志あり男性6割・女性7割に比べて高い割合であった。結婚への意志は加齢に応じて減じるとされているが、本調査で高校生の20年後、すなわ

ち30代後半のころの暮らしを予想してもらった結果、9割が「結婚している」と答えた。結婚の希望で「どちらとも言えない」と答えた群のうち8割が「結婚している」と予想したため、希望の割合より予想の割合が高くなっている。従って、高校生段階で結婚志向はかなり高いといえる。

また20年後には全体の約半数が「共働きで子どもがいる」とし、次いで「妻が専業主婦で子どもがいる」が全体の3分の1を占めた。2005年国勢調査によれば、子どもありの夫婦世帯の共働き率は全国で35.7%であり、本調査はこれを上回る数字を示している。

男女で異なった点としては「共働きで子どもがいる」において、女子の選択率が男子よりやや高かったこと、「未婚で一人暮らし」では男子の選択率が女子に比べてやや高かったことであった。女子の方が、より共働きで子どもを育てる生活を志向する傾向があった。

以上のように、調査場所が都内の1高校と限られたデータではあるが、都市部では共働きで子育てをすることを望む家庭が増えていくことが予測され、次世代の希望する生活を保障するためには、今後も更に仕事と家庭の両立支援を充実させていく必要があるといえる。

2) 職業観

ワーク・ライフ・バランスや育児休業法については、回答者である高校生のキャリアプラン設計上の助けとなることを視野に入れて設問した。前回は、20~30代の働いている成人を対象に実際のワーク・ライフ・バランスの達成度を調べたが、今回は高校生が将来働く場合を想定して各自の要望としての重要度を尋ねたので、前回に比べ得点は高くなっていた。なお、調査項目は職業観として前回から4項目 (No. 12~15) を追加している。その結果「自立できる収入」と同等に「仕事の内容に興味を持てる」が、男女とも得点が高くなっていた。また「時間を気にせず、思う存分仕事に打ち込めること」は男子が女子時比べて有意に高かった。この価値がワーク・ライフ・バランスと共存できるかどうか検討したところ、「仕事のための拘束時間が過度に長くならないこと」との相関は有意で ($p=0.254$)、8割がどちらも重要としていた。高校生は興味のある仕事に思う存分打ち込みながら、家庭や友人等と過ごす個人生活の時間も大切にしたいと考えていた。つまり、ワーク・ライフ・バランスのとれた就業環境を望んでいた。

一方、育児休業関連の知識については、知っていると答えた割合が過半数を超える項目は「男も女も育児休業できる」の1項目のみであった。全体に選択率は低く「育児休業を理由に解雇することが禁じられている」ことを知っていたのは15%に止まっていた。現在、若い世代の不安定雇用が大きな問題となっているが、労働者の権利についての教育の必要性がここでも見いだされた。

3) 子育て観・子ども観

子育て観のうち「子育ては、心理的・肉体的負担が大き

い」の高校生の得点は男子 3.1・女子 3.4 であったが、前回・前々回の調査データでは、大学生 3.27、乳幼児の親 3.35、20代男性 3.12、30代男性 3.14、20代女性 3.27、30代女性 3.34 となっていた。高校生の持つ育児に対する負担感は成人とあまり変わらないことが分かった。

子育て観の性差については、前回、前々回調査と同様、女子は「子育ては心理的・肉体的負担が大きい」などの子育て負担感が男子に比べて高かった。

女子に比べて男子の得点が高かった項目が4項目あり、そのうちの2項目は「父親は、子のために自分を犠牲にするのは当然」「自由な時間が減ってもかまわない」であった。犠牲・自由を失うことは、子育てのマイナスイメージであるが、前回、前々回調査でも男子の「かまわない」という肯定割合が高いという同傾向がみてとれる。一方、「子育ては楽しい」「自分を成長させる」などプラスイメージである項目は、今回は有意ではなかったが、女子の得点が高く、これも以前の調査と同傾向である(今回は有意)。女子は「子育て」を将来自分の担うものとして捉えているからこそ負担を感じ、同時に楽しいというプラスのイメージを持って臨もうとしていると推察する。それに対して、男子は「父親」や「子育て」を自分が担うというより、やや観念的に答える傾向がないだろうか。このことは、男子の得点が高かった残りの2項目「夫婦は子どもを持ってはじめて社会的に認められる」「子育てで次の社会をになう世代をつくりたい」と子育ての社会的価値を認めている点などから推察した。男女ともに子育てを肯定的に捉えている面があるが、その内容に違いがあると言える。

子ども観についても、全体として男女で異なる傾向が認められた。男子には、「一家の働き手、後継者、老後の面倒を見てもらう」など家族の一員としての役割を担う存在として、子どもの価値を認める傾向があり、女子には、「活気、喜び、生きがい、かけがえのなさ」など、子どもの存在そのものの価値を認める傾向が見られた。男子は女子に比べより伝統的価値観を持っていると言える。この点は、これまで他の多くの調査でも明らかにされている通りである。

3. 親・学校との関係

MF高群(男性性・女性性いずれも高い群いわゆるアントロジニー・タイプ)は、他群に比べて、幼い頃親から世話行為を多く受けたと認識しており、伊藤がまとめているように「アントロジニーな男女は、その親を、暖かく養護的で、支持的であると認知している」に通じるだろう¹⁴⁾。また、親からの言葉による価値観の伝承についても、MF高群は多く認識しているという結果であった。

我々の過去の調査で、EPSIの高い群は養育力があり、その背景に、父母の養育態度に傾聴・尊重が認められたが¹⁵⁾、MF高群についても、親の影響は大きいといえよう。

一方、高校生の将来のための支援について、高校生自身が学校と家庭の連携や分担をどのように望んでいるかについて調べた結果からは、男女いずれも、親からと、学校からは事柄によって区別があることが明らかとなった。全体としては「どちらでもない」とされた割合は低く、学校と親への期待は大きかった。また、それぞれの順位や割合に性差が認められ、男子は女子に比べ、より学校に期待するものが多い傾向がみられた。

以上のように学校と親の役割分担や連携上の参考となる資料が得られ、前述した、「育児・介護休業法」など労働者の権利の知識普及などとともに、家庭と学校で連携のもと、青年の成人期への移行の支援策に資されることを望みたい。

4. 3年間の総括と今後の課題

3年間にわたる本研究の特徴は、養育力について、ジェネラティビティを上位概念とし、ワーク・ライフ・バランス感覚、ジェネラティビティ行動、男性性・女性性、性役割観などとの関連を調べ、時代に即した養育力のあり方を多面的に検討したことといえる。

初年度および2年次において、明らかになった育児観、親の接し方における性差に注目し、3年次では男性性・女性性、性役割観を検討し、性差は更に明確になったと言える。性差は様々な局面でみられ、すべての性差をなくす必要があるわけではないが、平等主義的性役割観や、子どもや家庭に関する男女の価値観の違いは、将来の結婚の成立や子育てへの共同参画への影響は否めない。

一方、男性性と女性性に性差が見られなかった点について、どのように捉えるべきであろうか。男性の女性化、女性の男性化が言われているが、尺度の選定と調査方法を再考する必要もあろう。すなわち、今回使用した尺度が1978年作成であったこと、高校生が自己評価という問いの意図を正確に理解していたかという点である。

また男子においては、項目間の関連が多く見られたのに対し、女子は単純な相関は少なく、さらに、育児負担感で女性の得点が高いこと、女性が親から大人として扱われることが男性に比して少ないこと、などを考え合わせると、女性についてはさらに別の側面からの分析が必要と言える。

このように、男性性・女性性と養育力関連についての検証は慎重に進める必要があるが、ジェンダーにおける性差は、これからの社会における養育力分析の視点として不可欠なテーマと考える。

その理由は、男女共同参画に関する施策の推進が、少子対策にも資するものとされているという点である¹⁶⁾。少子化かどうかに関わらず男女共同参画は我が国のめざす方向性であるが、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、

経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」(男女共同参画社会基本法第2条)であるという平等主義の価値観が、次世代の男女に醸成されていかななくては、そのような社会は実現しないであろう。さらには、高校生が持っていた「自分の次の世代にはより幸福な生活を送って欲しい」という倫理観、前回の報告で示した「大人とは、自立するに留まらず自分以外の存在に心をかけ、世話をすることがでる」という大人観、それらが人の人生を充実させるということ気づくこと、すなわち、ジェネラティビティを育むことが必要である。

目黒らは、少子化問題のジェンダー分析として、「学校教育や市民教育を通じて新しいジェンダー意識やプロダクティブ・ライツおよびヘルスの概念を普及させる、などの施策を推進する必要がある。」としている¹²⁾。本研究においても、次世代のジェネラティビティを育むことを目的に、家庭・学校教育・母子保健・地域などが連携する若者支援の具体策を提示することを今後の課題としたい。

V. 結論

男性性・女性性がともに高い群は、養育力が高いという仮説は支持された。その背景として、親からの世話および価値観の伝承を多く受けていた。反対に男性性・女性性がともに低い群は、相対的に養育力が低く、男性性・女性性ともにバランスのとれた発達が望ましいことが示唆された。

平等性役割態度は養育力との相関が低く、結婚の希望との間に負の相関が認められた。平等主義的性役割観をもつ者にとって、現在の結婚のあり方が魅力のないものと映っていると考えられた。

価値観の性差としては、女子の育児負担感、平等性役割態度の得点が男子に比して高いことなどがあげられ、価値観の変革がのぞまれる。

ライフスキルの習得について、高校生は、学校と家庭それぞれに期待を持っており、学校と家庭が連携し、高校生男女それぞれの特徴を考慮して、支援に取り組むことが望まれる。

文献

- 1) 齋藤幸子・宮原忍・他. 少子社会における養育力の背景とその育成に関する研究(1)-ワーク・ライフ・バランスと養育力に関する調査-. 日本子ども家庭総合研究所紀要:第43集:145-164. 2007
- 2) 齋藤幸子・宮原忍・他. 少子社会における養育力の背景とその育成に関する研究(2)-ワーク・ライフ・バランスとジェネラティビティ行動-. 日本子ども家庭総合研究所紀要:第43集:141-164. 2007
- 3) 堀洋道監修/山本眞里子編、心理測定尺度集I、サイエ

- ンス社、2001初版、2003第6刷、153-157
- 4) 堀洋道監修/山本眞里子編、心理測定尺度集I、サイエンス社、2001初版、2003第6刷、148-152
- 5) 中西信男・佐方哲彦. EPSI-エリクソン心理社会的段階目録検査-. 上里一郎監修. 心理アセスメントハンドブック第2版. 東京. 西村書店. 2001. 365-376.
- 6) McAdams, D.P., & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015
- 7) McAdams, D.P., Hart, H.M., & Maruna, S. (1998). The anatomy of generativity. In D.P. McAdams and E. de St. Aubin (Eds.), *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation* (pp. 7-43). Washington, D.C.: APA Press.
- 8) 内山純子、井口由美子、中学生の生活体験と非行との関連について、科学警察研究所報告防犯少年編、Vol. 36. No. 2 December, 1995
- 9) 柏木恵子. 現代青年の性役割の習得、現代青年心理学講座5、現代青年の性意識第3章、東京. 金子書房、1973: 101-139.
- 10) 伊藤裕子. 青年期における性役割観の形成、東京、風間書房、平成9年
- 11) 柏木恵子、他、社会変動と家族・自己・ジェンダーに関する文化・発達心理学的研究、平成15~17年度科学研究費補助金(基礎研究(B)(2))研究成果報告書、平成18年6月
- 12) R.K. アンガー編著、女性とジェンダーの心理ハンドブック、北大路書房、2004
- 13) 目黒依子・西岡八郎、「少子化」問題のジェンダー分析、人口問題研究、56-4、2000、38-69
- 14) 文献10)、p48
- 15) 宮原忍・他. 少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究-第3報「次世代育成に関するアンケート調査」分析と総括、日本子ども家庭総合研究所紀要:第39集:151-167. 2002
- 16) 少子化と男女共同参画社会に関する社旗環境の国際比較」報告書、男女共同参画会議 少子化と男女共同参画に関する専門調査会、平成17年9月
- 17) 西平直喜、成人(おとな)になるということ-生育史心理学から(シリーズ人間の発達)、東京大学出版会、1990
- 18) E.H. エリクソン. ライフサイクル. その完結. みすず書房. 1989

性別集計結果(表1~18) n=238(男子94名・女子144名)

表1. 将来の結婚について(%)

	全体	男子	女子
1.絶対したい	44.1	44.7	43.8
2.なるべくしたい	37.8	35.1	39.6
3.どちらともいえない	12.6	14.9	11.1
4.あまりしたくない	4.2	3.2	4.9
5.絶対したくない	1.3	2.1	0.7
全 体	100.0	100.0	100.0

表2. 子どもを持つことについて(%)

	全体	男子	女子
1.絶対欲しい	39.5	37.2	41.0
2.欲しい	45.8	46.8	45.1
3.あまり欲しくない	9.2	9.6	9.0
4.欲しくない	2.5	4.3	1.4
5.絶対欲しくない	2.9	2.1	3.5
全 体	100.0	100.0	100.0

表3. 20年後の自身の暮らしについて(%)

	全体	男子	女子
1.共働きで、子どもはいない	4.6	4.3	4.9
2.共働きで、子どもがいる	49.6	42.6	54.2
3.夫が働き、妻は専業主婦で、子どもはいない	1.7	2.1	1.4
4.夫が働き、妻は専業主婦で、子どもがいる	33.6	34.0	33.3
5.未婚で一人暮らし	6.7	10.6	4.2
6.未婚で親と同居	1.7	2.1	1.4
7.その他:夫が専業主夫などご記入ください	1.7	3.2	0.7
全 体	100.0	100.0	100.0

表4. 育児休業法関連の知識の有無:各項目を「知っている」と答えた割合(%)

	全体	男子	女子	性差検定
1.子どもが1歳になるまでの間、育児休業することができる。	45.0	36.2	50.7	*
2.正社員でなくても、条件によっては育児休業することができる。	16.4	20.2	13.9	
3.男でも、女でも育児休業することができる。	55.0	45.7	61.1	*
4.病気・けがをした子ども(小学校に入る前)の看護のために、一定の日数休むことができる。	21.0	28.7	16.0	*
5.事業主は、育児休業の申出や取得を理由に、労働者を解雇その他不利益な取り扱いをしてはいけない。	15.1	20.2	11.8	
6.事業主は、小学校に入る前の子どもを養育している労働者が請求した場合、深夜労働をさせてはいけない。	7.1	12.8	3.5	**
不 明	22.3	26.6	19.4	

*P<0.05 **<0.01

表5. ワーク・ライフ・バランス感覚(4件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 出勤時間や休業など、柔軟な働き方ができること	3.46	0.76	3.6	0.59	
2. 女性が出産・育児等に影響なく(継続)就業できること	3.25	0.88	3.54	0.6	*
3. 高齢者(60歳以上)が希望に応じて継続して働けること	3.13	0.9	3.08	0.75	
4. 仕事のための拘束時間が過度に長くないこと	3.52	0.69	3.55	0.66	
5. 働くことに不安や悩みがないこと	3.51	0.83	3.5	0.72	
6. 自立できるだけの収入を得ること	3.75	0.55	3.74	0.49	
7. 家族や友人、恋人と過ごす時間がとれること	3.58	0.73	3.47	0.58	*
8. 家庭内で家事や育児をする時間がとれること	3.61	0.73	3.64	0.54	
9. 地域・社会活動に参加できること	2.82	0.88	2.48	0.89	*
10. 学習や趣味・娯楽のための時間がとれること	3.48	0.65	3.37	0.72	
11. 休養やくつろぎの時間がとれること	3.51	0.75	3.67	0.51	
12. 仕事の内容に興味を持てること	3.73	0.61	3.74	0.47	
13. 時間を気にせず、思う存分仕事に打ち込めること	3.46	0.67	3.25	0.69	*
14. 仕事を通じて社会に貢献すること	3.21	0.85	3.15	0.78	
15. 仕事を通して自分の能力が高められること	3.4	0.68	3.53	0.63	

表6. 子育て観(4件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 母親は、子どものために自分の個性や生き方を犠牲にするのは当然である	2.56	0.97	2.38	0.78	
2. 父親は、子どものために自分の個性や生き方を犠牲にするのは当然である	2.63	1	2.38	0.77	*
3. 女性は、親になっても子育てとは別の自分だけの目標を持つべきである	3.01	0.86	3.13	0.75	
4. 男性は、親になっても子育てとは別の自分だけの目標を持つべきである	3.08	0.82	3.11	0.75	
5. 子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たずに家にいるのが望ましい	3.15	0.89	3.29	0.85	
6. 子育てをすることにより、自分の自由な時間が減ってもかまわない	3.16	0.9	2.88	0.86	**
7. 子育てをすることにより、自分の仕事思うようにできなくてもかまわない	2.69	0.94	2.63	0.9	
8. 子育てにはお金がかかるが、やむをえない	3.54	0.77	3.58	0.63	
9. 子育ては、心理的・肉体的負担が大きい	3.1	0.97	3.4	0.79	*
10. 子育ての大変さを、配偶者など周りの人にわかってもらえないのは問題だ	3.12	0.93	3.48	0.78	**
11. 子育てには息抜きやリフレッシュが必要である	3.24	0.83	3.69	0.52	**
12. 子育ては楽しい	3.16	0.9	3.31	0.76	
13. 子育ては自分を成長させることができる	3.38	0.81	3.54	0.69	
14. 子どもを見ているとおもしろい	3.3	0.94	3.42	0.82	
15. 私は、人づきあいが得意である	2.7	0.93	2.6	0.86	
16. 人は、社会の中で助け合って生きていくことが望ましい	3.38	0.83	3.51	0.59	
17. 仕事と、子育てなどの家庭生活を両立させることは大切である	3.5	0.71	3.46	0.65	
18. 夫婦は子どもを持つてはじめて社会的に認められる	2.24	1.02	1.78	0.89	**
19. 子育てで次の社会をになう世代をつくりたい	2.91	0.99	2.51	0.92	**
20. 自分の次の世代には、より幸福な生活を送ってほしい	3.47	0.81	3.56	0.67	

表7. 子ども観(4件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 家庭に明るさや活力を与えてくれる	3.60	0.72	3.77	0.47	
2. 喜びや生きがいを与えてくれる	3.60	0.71	3.74	0.50	
3. 心に安らぎや充実感を与えてくれる	3.52	0.76	3.60	0.56	
4. かけがえのない	3.71	0.67	3.79	0.49	
5. 夫婦の絆となる	3.47	0.80	3.58	0.72	
6. 自分の生命を伝える	3.33	0.93	3.42	0.79	
7. 姓や家を継ぐ	2.81	1.09	2.63	0.99	
8. 一家の働き手として必要	2.67	1.00	2.31	0.93	**
9. 自分の夢や志を託す後継者	2.51	1.12	2.15	1.02	*
10. 老後の面倒を見てもらう	2.54	1.06	2.33	0.96	

* p<0.05 ** p<0.01

表8. 平等主義性役割態度スケール短縮版((R)は逆転項目、5件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 女性が社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなる(R)	2.83	1.19	2.77	1.02	
2. 女性は社会的地位や賃金の高い職業は持たない方がよい(R)	3.54	1.25	4.12	0.95	**
3. 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである(R)	3.48	1.23	4.22	0.98	**
4. 主婦が働くど夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはりやすい(R)	3.06	1.22	3.67	1.08	**
5. 女性のいるべき場所は家庭で、男性のいるべき場所は職場である(R)	3.36	1.33	4.17	1.14	**
6. 主婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよくない(R)	3.19	1.21	3.85	1.03	**
7. 結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してもよい	3.32	1.24	3.53	1.01	
8. 家事は男女の共同作業となるべきである	4.02	1.04	4.18	0.84	
9. 子育ては女性にとって一番大切なキャリアである(R)	2.53	1.03	2.86	1.15	*
10. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが大切である(R)	2.64	1.22	2.98	1.19	**
11. 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである(R)	3.17	1.15	4.03	1.06	*
12. 女性は家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい(R)	2.6	1.05	2.92	1.17	*
13. 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である	3.56	0.98	3.73	0.92	
14. 女性は子どもが生まれても、仕事を続けたほうがよい	3.27	1.02	3.3	0.95	
15. 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい(R)	2.35	1.05	2.77	0.98	**
16. 女性は責任の重い競争の激しい仕事はしないほうが良い(R)	2.67	1.12	3.35	1.07	**
合計	49.6	9.64	56.45	8.63	**

Cronbach α = 0.8403(全体)

表9-1. 男性性(7件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 指導力のある	4.49	1.32	4.02	1.03	**
2. 大胆な	3.96	1.3	3.57	1.21	**
3. 決断力のある	5.21	1.04	4.96	0.94	**
5. 行動力のある	5.05	1.19	5.08	0.97	
6. 信念を持った	4.95	1.16	4.92	1.21	
8. 頼りがいのある	4.81	1.47	4.8	1.2	
12. たくましい	3.97	1.44	3.99	1.36	
13. 自己主張のできる	4.78	1.28	4.9	1.07	
15. 冒険心に富んだ	4.01	1.64	3.94	1.32	
17. 意志の強い	4.87	1.25	4.91	1.14	
男性性合計	46.1	9.64	45.08	6.8	

Cronbach α = 0.8044(全体)

表9-2. 女性性(7件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
4. かわいい	3.3	1.81	3.52	1.62	
7. 優雅な	3.61	1.6	3.43	1.34	
9. 色気のある	3.11	1.78	2.49	1.55	**
10. 言葉使いのていねいな	4.57	1.53	4.84	1.3	
11. 静かな	3.74	1.34	2.75	1.45	**
14. 繊細な	3.82	1.48	3.43	1.34	*
16. 従順な	3.74	1.42	3.31	1.36	
18. 愛嬌のある	4.02	1.62	4.49	1.45	*
19. 献身的な	4.3	1.36	4.15	1.33	
20. おしゃれな	3.6	1.65	3.88	1.52	
女性性合計	37.81	11.08	36.28	9.08	

Cronbach α = 0.8254(全体)

* p<0.05 ** p<0.01

表10. EPSI(エリクソン心理社会的発達段階目録)((R)は逆転項目、5件法)

* p<0.05 ** p<0.01

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 私は、自分が何になりたいのかをはっきりと考えている	2.6	1.09	2.59	1.05	
2. 私は、自分が混乱しているように感じている(R)	1.44	1.21	1.44	1.11	
3. 私は、自分がどんな人間であるのかをよく知っている	2.71	1.02	2.67	0.93	
4. 私は、自分の人生をどのように生きたいかを自分で決められない(R)	1.99	1.22	2.4	1.14	**
5. 私は、自分のしていることを本当はわかっていない(R)	1.62	1.18	2.16	1.12	**
6. 私は、自分が好きだし、自分に誇りをもっている	2.17	1.11	1.89	1.09	
7. 私には、充実感がない(R)	1.73	1.16	2.06	1.05	*
同一性合計	14.26	4.22	15.21	4.02	*
8. 誰かに個人的な話をされると、私は当惑してしまう(R)	1.81	1.15	2.4	1.03	**
9. 私は、特定の人と深いつきあいができる	3.05	0.97	3.13	0.87	
10. 私は、あたたかく親切な人間である	2.27	1.08	2.14	0.99	
11. 私は、もともと1人ぼっちである(R)	1.73	1.18	2.35	1.22	**
12. 私は、他の人たちと親密な関係を持っている	2.69	0.95	2.79	0.88	
13. 私は、他の人よりも目立つのを好まない(R)	1.43	1.09	1.77	1.09	
14. 私は、他の人たちとなかなか親しくなれない(R)	1.89	1.15	2.13	1.09	
親密性合計	14.87	4.2	16.72	3.68	**
15. 私は、後輩や部下のめんどうをよく見る	2.39	1.08	2.21	1.01	
16. 私は、将来に残すことのできる業績をあげつつある	1.79	1.14	1.53	0.92	*
17. 私は、よい親である(親になる)自信がある	2.29	1.14	2.13	1.09	
18. 私は、後輩や部下を指導するのが苦手である(R)	1.52	1.1	1.72	1.02	
19. 私は、自分を甘やかすところがある(R)	0.95	0.93	1.02	0.91	
20. 私は、親であること(親になること)が不安である(R)	1.56	1.15	1.51	1.13	
21. 私は、未来を担う子どもたちを育てていきたいと思う	2.87	1.03	2.53	1.02	**
生殖性合計	13.37	3.87	12.65	3.94	
21項目合計	42.5	9.69	44.58	8.85	

Conbach $\alpha = 0.7516$ (全体)

表11. ジェネラティビティ行動(3件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準	平均	標準	
1. 自分のもっている技術を誰かに教えた	0.98	0.84	0.94	0.87	
2. 年下の人の手本となるようなことをした	0.77	0.8	0.79	0.82	
3. 誰かの個人的な話に耳を傾けた	1.31	0.73	1.71	0.58	**
4. 誰かに善悪について教えた	0.64	0.77	0.64	0.8	
5. 誰かに、自分の幼い頃の話をした	0.73	0.83	1.19	0.86	**
6. 自分の家族以外の誰かの子どもの世話をした	0.54	0.81	0.6	0.84	
7. リーダー的な立場に選ばれた	0.48	0.7	0.53	0.77	
8. 家族以外のグループのために計画を立てた	0.55	0.78	0.66	0.8	
9. 誰かのために、なにかを作ってあげた	0.62	0.78	1.31	0.82	**
10. 友人や知り合いの手伝いをした(修理や引っ越しなど)	0.5	0.76	0.53	0.8	
11. 趣味で、植物を植えたり、世話をした	0.32	0.68	0.29	0.64	
12. 家や家具などで壊れたものを修理した	0.32	0.61	0.29	0.59	
13. 誰かの応急処置や看病をした	0.31	0.64	0.39	0.69	
14. 新しい技術(言語、楽器、機械操作など)を学んだ	0.57	0.81	0.8	0.86	*
15. 過去の経験を生かして、誰かに助言した	0.67	0.79	0.9	0.83	*
合計	9.31	7.34	11.57	6.57	**

表12. 一人前の大人とは(4件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 責任ある行動がとれる	3.74	0.6	3.9	0.31	*
2. 経済的に親の世話にならない	3.52	0.67	3.48	0.6	
3. 社会的常識が身につく	3.65	0.62	3.78	0.43	
4. 社会に貢献する	3.15	0.89	3.26	0.71	
5. 親から精神的に自立する	3.6	0.66	3.7	0.53	
6. 家族ができる(結婚する・子どもが産まれる)	3.02	0.95	2.81	0.95	
7. 受容・寛容・我慢強さを身につける	3.5	0.73	3.53	0.61	
8. 自分以外の人を経済的に養うことができる	3.23	0.89	3.01	0.81	*
9. 税金を納める	3.19	0.93	3.4	0.79	
10. 人と調和してやっつけける	3.51	0.67	3.56	0.63	
11. 自分を客観的に見られる	3.35	0.79	3.49	0.59	
12. 判断力・決断力がつく	3.71	0.58	3.76	0.44	
13. 自分より年下の人の面倒をみる	3.37	0.7	3.11	0.73	**
14. 周りの人を気遣い、世話をやく	3.38	0.75	3.38	0.68	

表13. 「未熟な大人が増えている」と言われる原因について(%)

	男子	女子	全体
1. 親が、青年期以降の子どもの、大人として扱わないからである	12.8	23.6	19.3
2. 親元を離れて生活できる社会基盤(仕事や住まい)がないからである	10.6	11.1	10.9
3. 若者が、大人になりたくないと思っているからである	12.8	5.6	8.4
4. 大人になるとはどういうことかのイメージが備わっていないからである	17.0	14.6	15.5
5. 人間関係が希薄になり、社会性などが育たないからである	14.9	14.6	14.7
6. 家庭の教育機能が低下しているからである	20.2	20.1	20.2
7. 学校教育の中で、人格形成がされにくいからである	4.3	4.9	4.6
8. その他	3.2	2.1	2.5
9. 未熟な大人が増えているとは思わない	3.2	2.1	2.5
無回答	1.1	1.4	1.3
	100.0	100.0	100.0

表14-1. お父さんは、あなたをどれくらい大人として扱ってくれますか(%)

	男子	女子	全体
1. いつも大人扱い	20.2	5.6	11.3
2. 時々大人扱い	48.9	51.4	50.4
3. まだ大人として扱ってくれない	14.9	27.8	22.7
4. 非該当	14.9	13.9	14.3
無回答	1.1	1.4	1.3
	100.0	100.0	100.0

表14-2. お母さんは、あなたをどれくらい大人として扱ってくれますか(%)

	男子	女子	全体
1. いつも大人扱い	13.8	8.3	10.5
2. 時々大人扱い	53.2	55.6	54.6
3. まだ大人として扱ってくれない	26.6	31.3	29.4
4. 非該当	5.3	3.5	4.2
無回答	1.1	1.4	1.3
	100.0	100.0	100.0

表15. 大人度自己評価(%で表された数値)

	男子	女子	全体
N	92	143	234
平均	51.9	47.5	49.2
標準偏差	28.1	20.3	23.7
最小値	0	0	0
最大値	120	100	120
中央値(メディアン)	50	50	50

表16-1. お父さんが、幼児や小学生の頃あなたにしてくれたこと(4件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 私と遊んでくれた	3.08	0.94	3.26	0.85	
2. その日の出来事について私の話を聞いてくれた	2.8	1.04	2.94	0.99	
3. いろいろな所へつれて行ってくれた	3.11	0.99	3.37	0.85	*
4. 私を抱いたり、ひざの上に乘せたり、ほおずりをしたりしてくれた	2.63	1	3.01	0.97	**
5. 自分の子どもの頃のことや昔の思い出について話してくれた	2.8	1.02	2.71	1.09	
6. 運動会や学芸会など学校の行事に来てくれた	3.11	0.97	3.25	0.92	
7. 誕生日やクリスマスなどのお祝いをしてくれた	3.38	0.91	3.58	0.75	
Q25合計	20.89	5.44	22.13	4.86	

表16-2. お母さんが、幼児や小学生の頃あなたにしてくれたこと(4件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 私と遊んでくれた	3.16	0.9	3.45	0.68	*
2. その日の出来事について私の話を聞いてくれた	3.22	0.88	3.45	0.78	*
3. いろいろな所へつれて行ってくれた	3.13	0.85	3.45	0.77	**
4. 私を抱いたり、ひざの上に乘せたり、ほおずりをしたりしてくれた	3.1	0.88	3.29	0.85	
5. 自分の子どもの頃のことや昔の思い出について話してくれた	2.94	0.9	3.06	0.98	
6. 運動会や学芸会など学校の行事に来てくれた	3.47	0.77	3.72	0.56	**
7. 誕生日やクリスマスなどのお祝いをしてくれた	3.5	0.77	3.82	0.49	**
Q26合計	22.51	4.47	24.31	3.78	**

* p<0.05 ** p<0.01

表17. 成長過程で親から言われたこと(4件法)

	男子		女子		検定
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 日常的なあいさつ	3.49	0.8	3.62	0.64	
2. 身の回りの整理・整頓	3.53	0.73	3.62	0.63	
3. お金や物を大事にする	3.56	0.74	3.53	0.69	
4. 勉強なさい	3.06	1.13	2.68	1.13	**
5. 目上の人を尊敬する	2.91	1.04	2.6	0.95	*
6. 相手の立場を理解する	3.12	0.98	2.83	0.98	*
7. ねばり強く何かをやり通す	3.06	0.95	2.92	0.94	
8. 人に迷惑をかけない	3.65	0.6	3.23	0.88	**
9. ガマンする	3.23	0.95	3.02	0.92	
10. 友達と仲良くし、助け合う	3.29	0.93	3.14	0.92	
11. 人から信頼される	3.06	0.93	2.83	0.95	*
12. 約束や決まりを守る	3.54	0.73	3.63	0.68	
13. 好き嫌いや利害にとらわれず公平にふるまう	2.96	0.97	2.77	0.93	
14. すすんで新しい方法を見つける	2.71	1.01	2.38	0.96	*
15. 自分で物事を計画し実行する	2.91	0.95	2.61	0.93	*
16. 安全に気をつける	3.49	0.8	3.66	0.63	
17. 人に親切にする	3.42	0.9	3.28	0.81	
18. うそを言わない	3.28	0.88	3.21	0.92	
19. 自然を大切にすること	2.8	1.07	2.54	0.91	*
20. 自分と異なる意見でも尊重する	2.76	1.04	2.51	0.94	
21. 一時的な衝動をおさえる	2.89	1.06	2.63	0.94	*
22. ていねいなことばづかい	3.29	0.93	3.46	0.74	
23. 道路や公園をよごさないように気をつける	2.83	1.04	2.64	0.9	
24. 弱者をいたわる	3.18	1	2.65	0.95	**
Q27合計	76.03	15.42	72.06	12.39	*

* p<0.05 ** p<0.01

表18. 大人に教えてもらいたいこと、学校が親か(%)

	男子	1. どちらかと言え ば学校	2. どちらかと言え ば親	3. どちら も同じくら い	4. どちら でもない	無回答	全体
		女子	男子	女子	男子		
1. 仕事の選び方		52.1	22.3	19.1	6.4	0.0	100.0
	女子	32.6	22.2	32.6	11.1	1.4	100.0
7. 政治や経済社会のこと		51.1	18.1	22.3	7.4	1.1	100.0
	女子	43.8	20.8	26.4	7.6	1.4	100.0
9. 性や身体のこと		44.7	12.8	16.0	25.5	1.1	100.0
	女子	35.4	13.2	20.1	29.9	1.4	100.0
4. 家事や育児		21.3	58.5	12.8	6.4	1.1	100.0
	女子	6.3	77.8	10.4	3.5	2.1	100.0
5. お金や財産の管理		25.5	54.3	11.7	7.4	1.1	100.0
	女子	9.7	70.1	13.9	4.9	1.4	100.0
2. 人との付き合い方		37.2	33.0	19.1	9.6	1.1	100.0
	女子	16.7	43.8	25.7	12.5	1.4	100.0
3. 異性との付き合い方		29.8	22.3	19.1	27.7	1.1	100.0
	女子	10.4	31.9	15.3	41.0	1.4	100.0
6. 年金や保険など社会保障制度		44.7	34.0	12.8	6.4	2.1	100.0
	女子	31.3	44.4	20.1	2.8	1.4	100.0
8. 趣味や娯楽、余暇の過ごし方		21.3	26.6	23.4	27.7	1.1	100.0
	女子	7.6	25.0	21.5	43.8	2.1	100.0

表19. 性役割観と養育力関連項目合計得点の相関

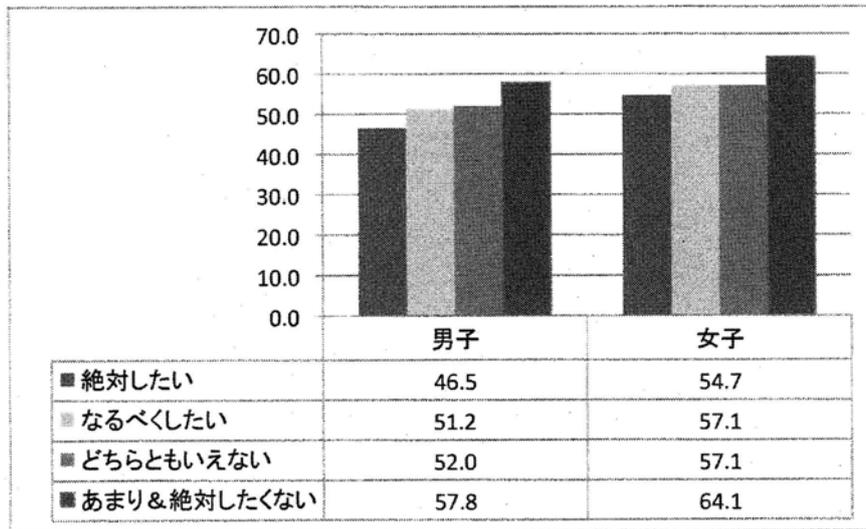
ノンパラメトリック: Spearmanの順位相関係数(ρ)

変数	vs. 変数	全体		男子		女子	
		係数(ρ)	p値	係数(ρ)	p値	係数(ρ)	p値
Q9子ども願望	Q8結婚希望	0.689	**	0.749	**	0.649	**
Q15平等性役割	Q8結婚希望	-0.203	**	-0.273	**	-0.202	*
Q15平等性役割	Q9子ども願望	-0.085		-0.139		-0.101	
Q15平等性役割	Q16男性性	-0.041		-0.241	*	0.153	
Q15平等性役割	Q16女性性	-0.244	**	-0.425	**	-0.130	
Q15平等性役割	Q17EPSI21項目	0.042		-0.161		0.111	
Q15平等性役割	Q18ジェネラティビティ行動	0.052		-0.168		0.073	
Q16男性性	Q8結婚希望	0.133	*	0.249	**	0.053	
Q16男性性	Q9子ども願望	0.131	*	0.223	*	0.078	
Q16女性性	Q8結婚希望	0.296	**	0.457	**	0.180	*
Q16女性性	Q9子ども願望	0.243	**	0.380	**	0.151	
Q16女性性	Q16男性性	0.455	**	0.512	**	0.411	**
Q17EPSI21項目	Q8結婚希望	0.176	**	0.305	**	0.081	
Q17EPSI21項目	Q9子ども願望	0.217	**	0.352	**	0.117	
Q17EPSI21項目	Q16男性性	0.141	*	0.236	*	0.093	
Q17EPSI21項目	Q16女性性	0.085		0.261	*	-0.039	
Q18ジェネラティビティ行動	Q8結婚希望	0.180	**	0.246	*	0.138	
Q18ジェネラティビティ行動	Q9子ども願望	0.200	**	0.199		0.204	*
Q18ジェネラティビティ行動	Q16男性性	0.031		0.039		0.075	
Q18ジェネラティビティ行動	Q16女性性	0.093		0.138		0.113	
Q18ジェネラティビティ行動	Q17EPSI21項目	0.186	**	0.303	**	0.098	

*p<0.05 **p<0.01

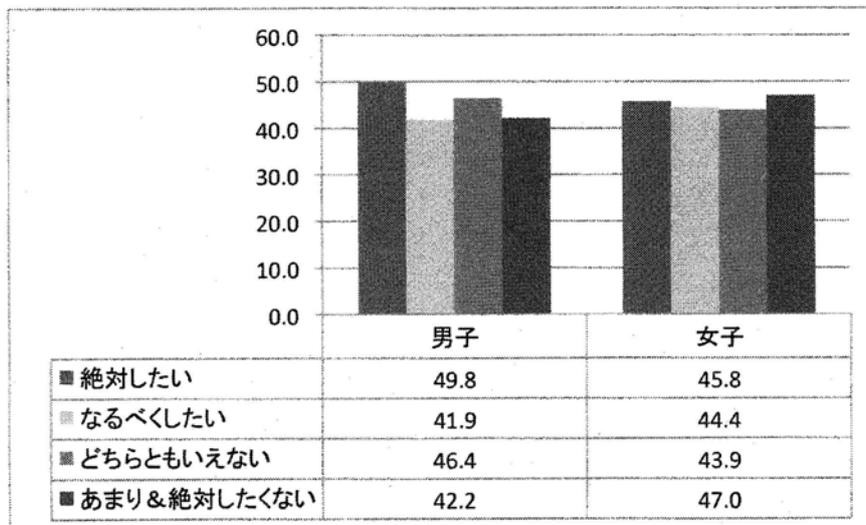
表20. 男性性女性性高低4群(2タイプ)

	男子	女子	計
M高・F高(MF高群)	35	37	72
M高・F低(M高群)	14	25	39
M低・F高(F高群)	16	30	46
M低・F低(MF低群)	29	52	81
計	94	144	238
M高・F高(MF高群)	35	37	72
自分の性高い群	14	30	44
自分と反対の性が高群	16	25	41
M低・F低(MF低群)	29	52	81
計	94	144	238



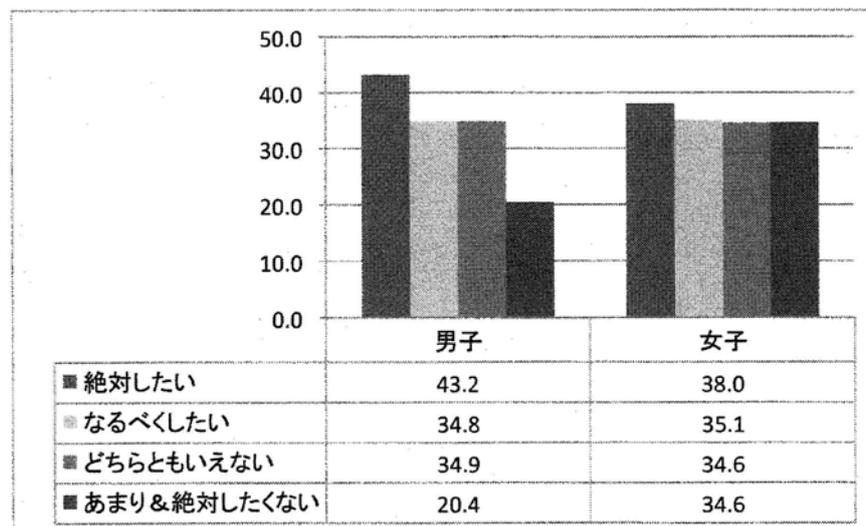
順位和検定p値：男子0.0497* / 女子0.025*

図1-1.結婚観別 平等性役割態度平均得点



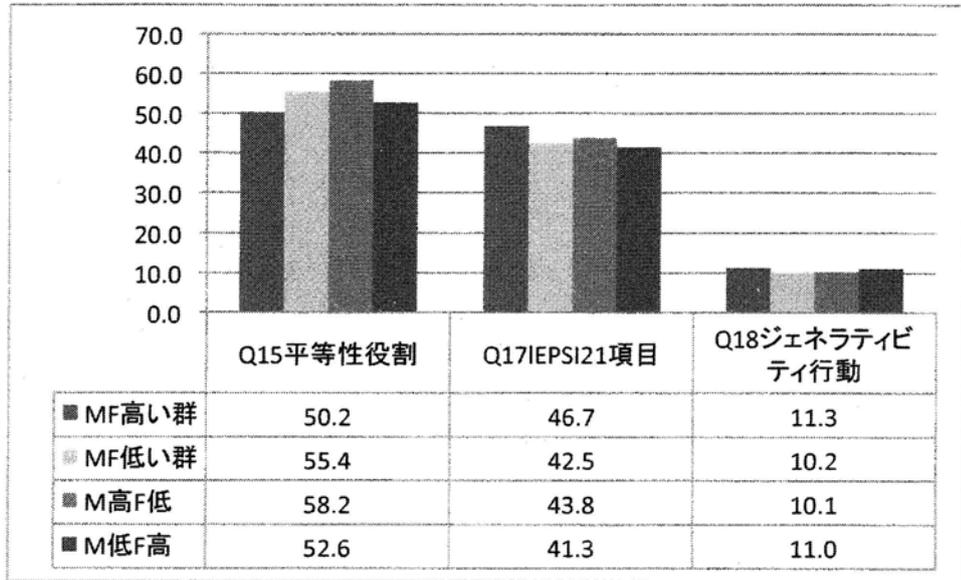
順位和検定p値：男子0.0042* / 女子 n.s.

図1-2.結婚観別男性性平均得点



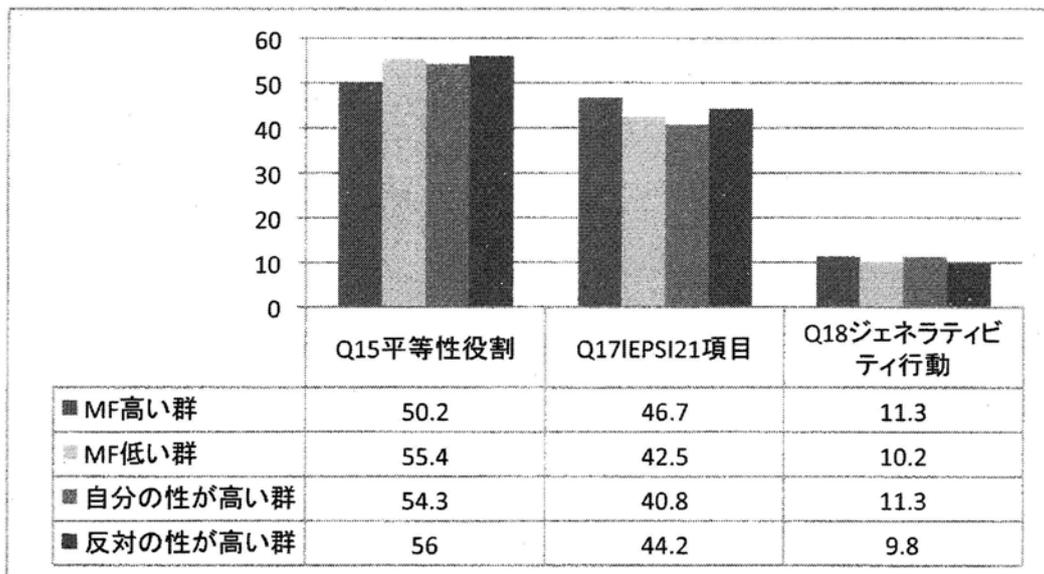
順位和検定p値：男子<0.0001* / 女子n.s.

図1-3.結婚観別女性性平均得点



順位和検定p値：Q15 0.0004* / Q17 n.s. / Q18 n.s.

図2-1. 男性性女性性高低4群別得点



順位和検定p値：Q15 0.0136* / Q17 0.0187* / Q18 n.s.

図2-2. 男性性女性性高低群別得点

図3 子育て観：男性女性性高低4群別得点平均値

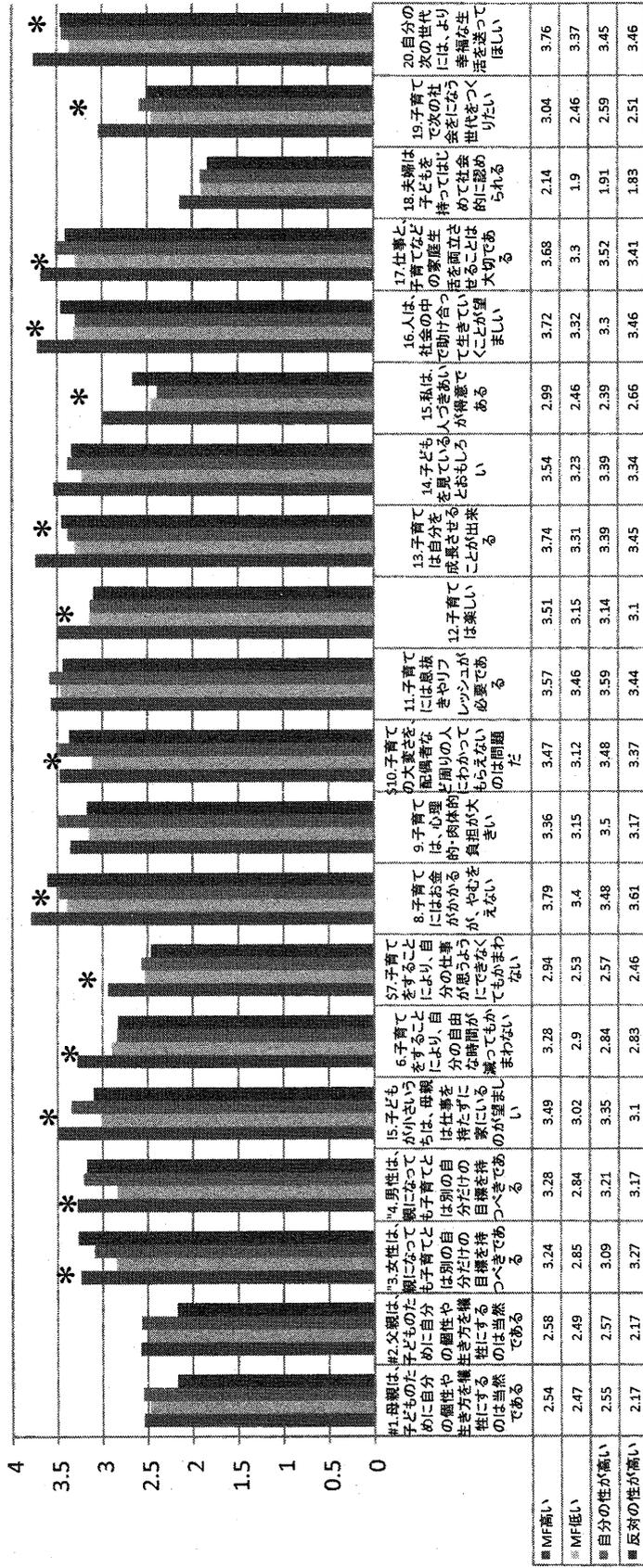
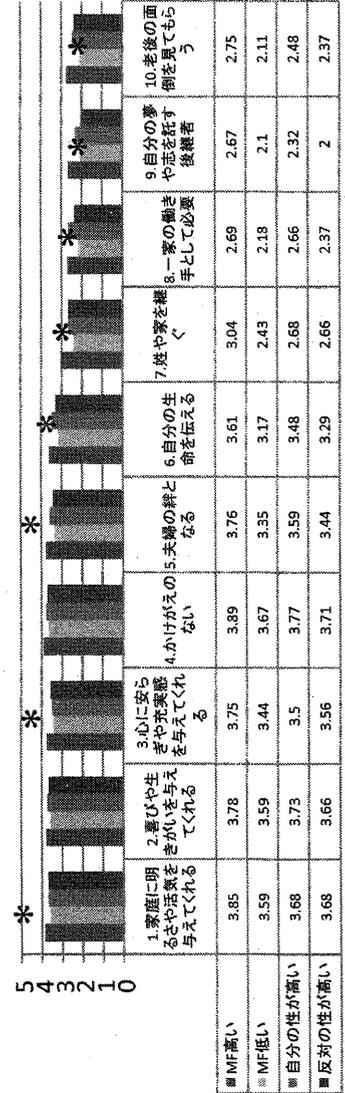


図4 子ども観：男性女性性高低4群別得点平均値



*p<0.05

図5. 平等主義的性役割態度：男性性女性性高低4群別得点平均値

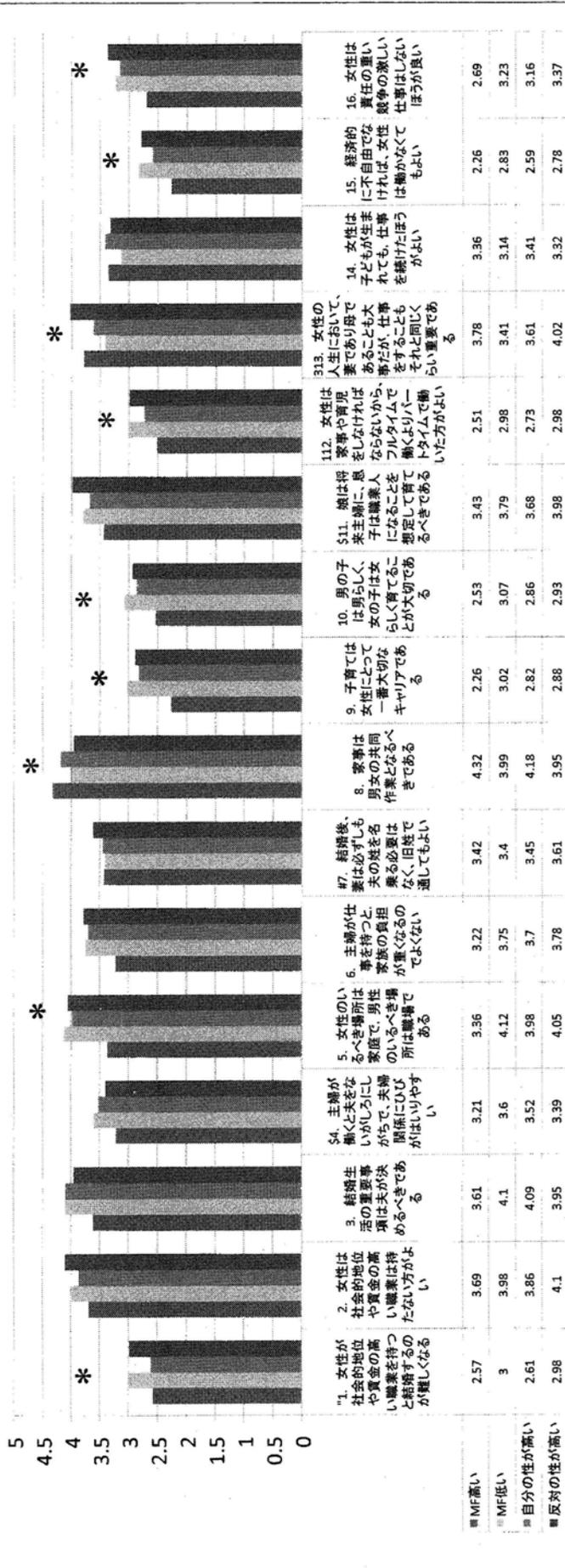
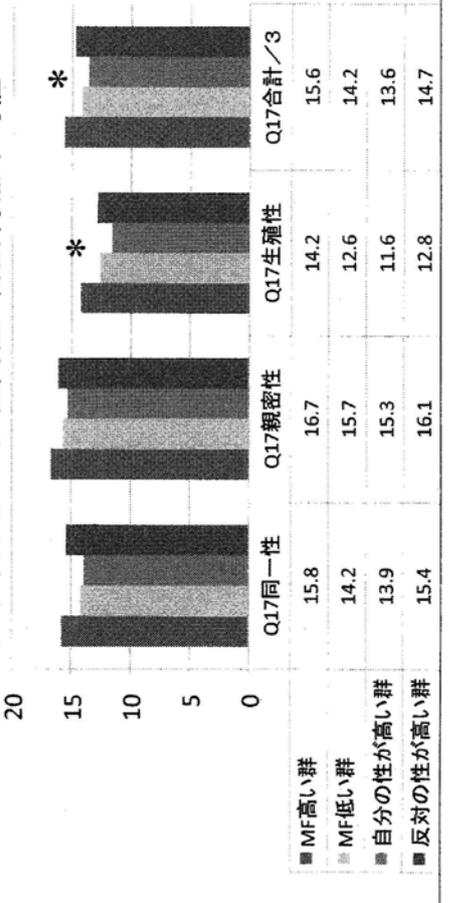


図6 EPSI21項目：男性性女性性高低4群別得点平均値



注)図5の1、2、3、4、5、6、9、10、11、12、15、16は逆転項目であり、得点を変換してある(表8参照)。得点が高い方が平等主義的である。

* p < 0.05

図7. ジェネラティブイ行動：男性性女性性高低4群別得点平均値

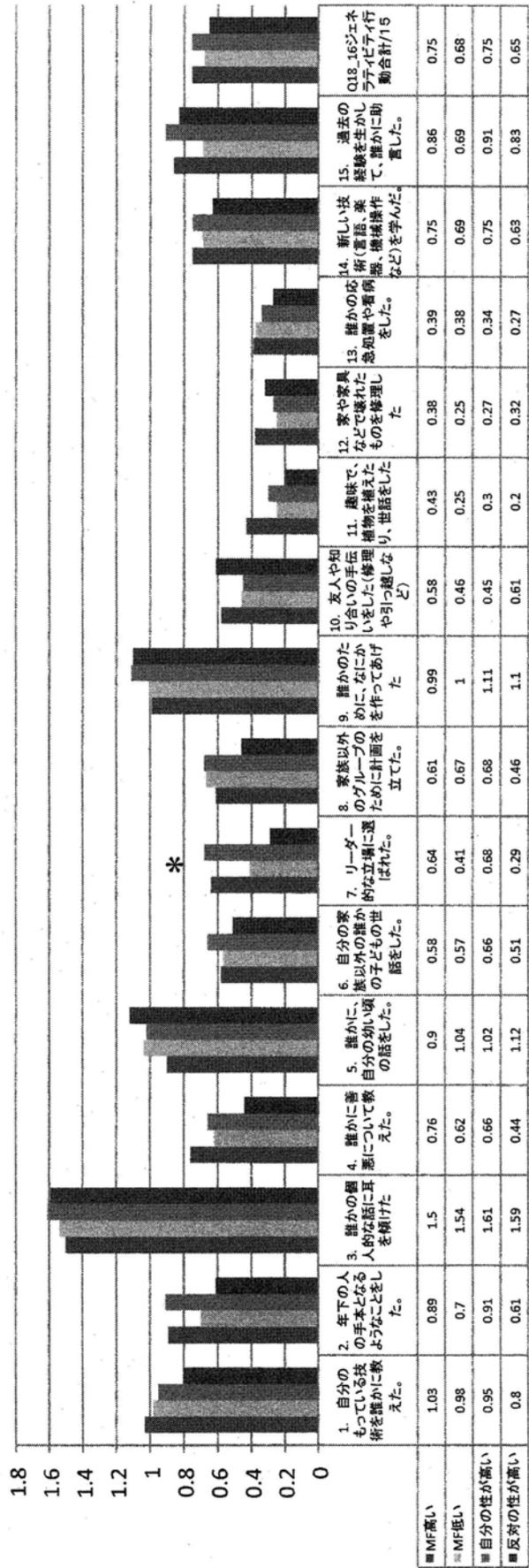
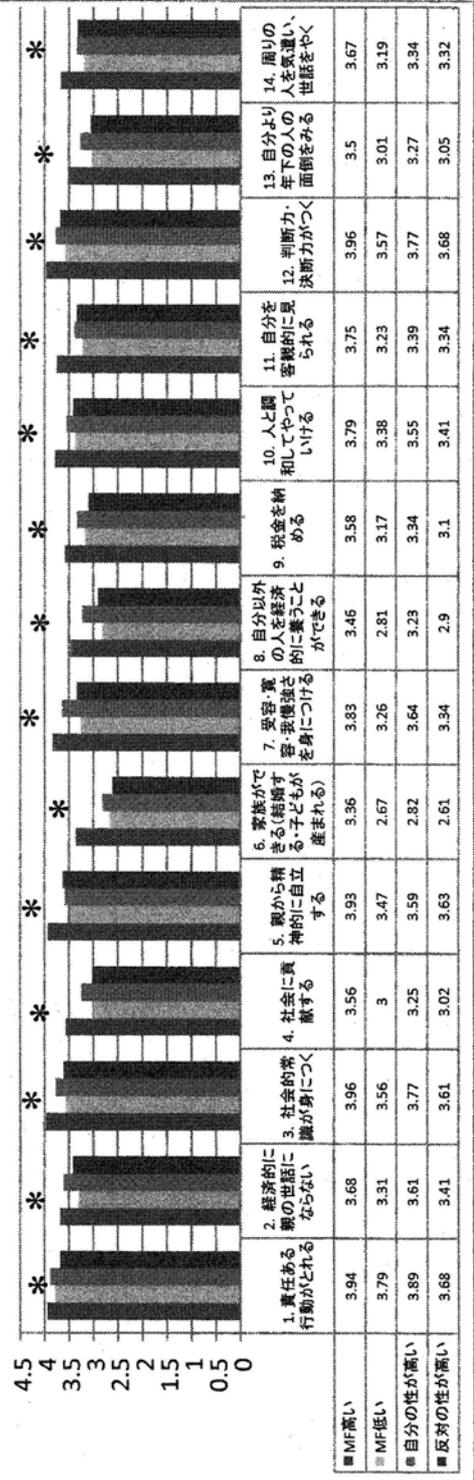


図8 一人前の大人とは：男性性女性性高低4群別得点平均値



* p<0.05

図9-1. 幼い頃の父の関わり: 男性女性性高低4群別平均値

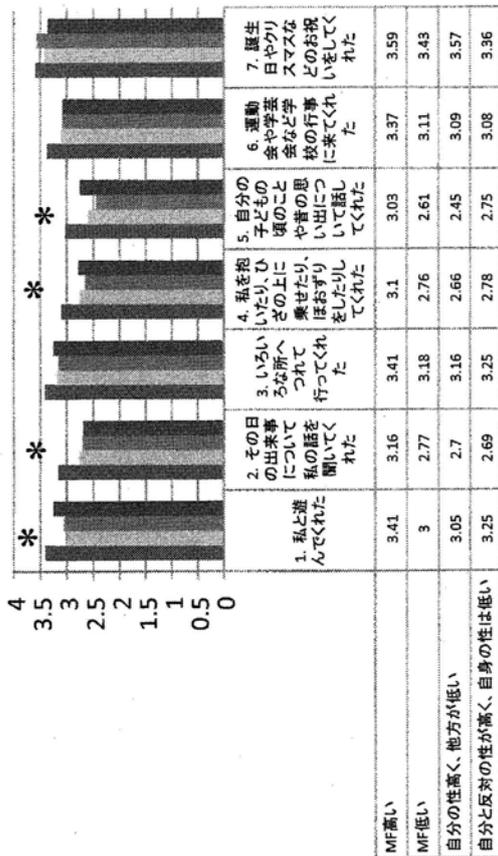


図9-2. 幼い頃の母の関わり: 男性女性性高低4群別平均値

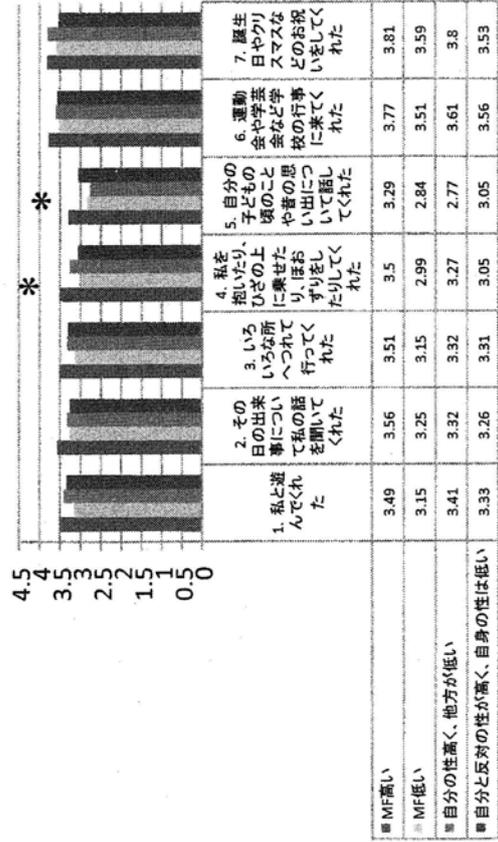
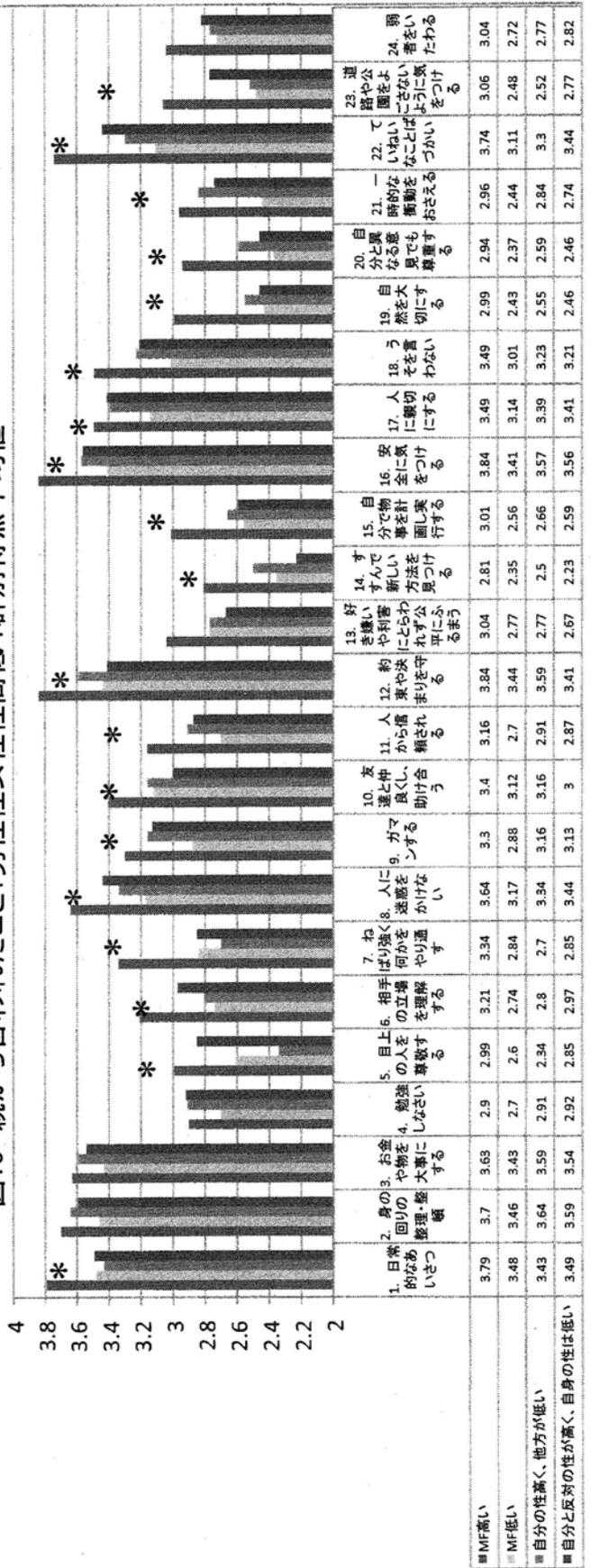


図10 親から言われたこと: 男性女性性高低4群別得点平均値



次世代育成についてのアンケート〈高校生用〉

あなたの当てはまる項目の番号を選んで○をつけてください。() には、あてはまる言葉や数字を記入してください。あなたが該当しない設問は、指示にしたがって先へお進みください。

1. あなたは 1 男 2 女
2. 年齢 () 歳
3. 学年 (1 ・ 2 ・ 3) 年生
4. お住まいの地域 () 都道府県 () 市区町村

5. 現在のあなたのご家族について、うかがいます。

- 5-1. お父さんは : 1. 同居 2. 別居(単身赴任など) 3. いない
- 5-2. お母さんは : 1. 同居 2. 別居(単身赴任など) 3. いない
- 5-3. きょうだいは : 1. いない 2. いる () 人
- 5-4. 上記以外の同居人 : 1. なし 2. 祖父 3. 祖母 4. その他 () 人

あなたの将来について伺います

6. 高校卒業後の進路はどのように考えていますか。1つ選んでください。

1. 専門・専修学校 2. 短大・高专 3. 大学 4. 大学卒業後大学院へ
5. 就職 6. その他 ()

7. 将来どのような仕事につきたいか、決まっていますか。1つ選んでください。

1. はい 2. いいえ 3. 仕事はしない・したくない

S07-1「はい」と答えた方のような仕事ですか。1つ選んでください。分類先が分らない場合は、10 () に具体的に記入してください。

1. 専門的・技術的職業
2. 管理的職業
3. 事務
4. 販売
5. サービス職業
6. 保安
7. 農林漁業
8. 運輸・通信
9. 生産工程・労働作業
10. その他 ()

8. 将来の結婚について、当てはまる項目を1つ選んでください。

1. 絶対したい
2. なるべくしたい
3. どちらともいえない
4. あまりしたくない
5. 絶対したくない

9. 将来、あなたは自分の子どもが欲しいですか。当てはまる項目を1つ選んでください。

1. 絶対欲しい
2. 欲しい
3. あまり欲しくない
4. 欲しくない
5. 絶対欲しくない

10. 20年後のあなたはどのように暮らしていると思いますか。1つ選んでください。

1. 共働きで、子どもはいない
2. 共働きで、子どもがいる
3. 夫が働き、妻は専業主婦で、子どもはいない
4. 夫が働き、妻は専業主婦で、子どもがいる
5. 未婚で一人暮らし
6. 未婚で親と同居
7. その他：夫が専業主夫などをご記入ください()

11. 将来あなたが仕事についていた時、どのような生活を送りたいと思いますか。次にあげる各項目があなたにとって、どれくらい重要か、[4重要である]から[1重要でない]までの4段階から、あてはまる番号を1つずつ選んで○をつけてください。

4. 重要である 3. まあ重要である 2. あまり重要でない 1. 重要でない
1. 出勤時間や休業など、柔軟な働き方ができること…………… 4—3—2—1
2. 女性が出産・育児等に影響なく(継続)就業できること…………… 4—3—2—1
3. 高齢者(60歳以上)が希望に応じて継続して働けること…………… 4—3—2—1
4. 仕事のための拘束時間が過度に長くないこと…………… 4—3—2—1
5. 働くことに不安や悩みがないこと…………… 4—3—2—1
6. 自立できるだけの収入を得ること…………… 4—3—2—1
7. 家族や友人、恋人と過ごす時間がとれること…………… 4—3—2—1
8. 家庭内で家事や育児をする時間がとれること…………… 4—3—2—1
9. 地域・社会活動に参加できること…………… 4—3—2—1
10. 学習や趣味・娯楽のための時間がとれること…………… 4—3—2—1
11. 休養やくつろぎの時間がとれること…………… 4—3—2—1
12. 仕事の内容に興味を持てること…………… 4—3—2—1
13. 時間を気にせず、思う存分仕事に打ち込めること…………… 4—3—2—1
14. 仕事を通じて社会に貢献すること…………… 4—3—2—1
15. 仕事を通して自分の能力が高められること…………… 4—3—2—1

12. 育児休業などについて、以下の文章であなたが知っていることがあったら、そのすべてに○をつけてください。

1. 子どもが1歳になるまでの間、育児休業することが出来る。
2. 正社員でなくても、条件によっては育児休業することが出来る。
3. 男でも、女でも育児休業することが出来る。
4. 病氣・けがをした子ども(小学校に入る前)の看護のために、一定の日数休むことができる。
5. 事業主は、育児休業の申出や取得を理由に、労働者を解雇その他不利益な取り扱いをしてはいけない。
6. 事業主は、小学校に入る前の子どもを養育している労働者が請求した場合、深夜労働をさせてはいけない。

15. 家庭生活に関する次の文章をどう思いますか。[5まったくその通り]から[1ぜんぜんそう思わない]の5段階のうち、あなたの気持ちに一番近いものを1つ選んで番号に○をつけてください。

	5 まったくその通り	4 まあそう思う	3 なにとやら思っている	2 なあんまり思っていない	1 ぜんぜん思わない
1. 女性が社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなる	5	4	3	2	1
2. 女性は社会的地位や賃金の高い職業は持たない方がよい	5	4	3	2	1
3. 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである	5	4	3	2	1
4. 主婦が働くことと夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはいりやすい	5	4	3	2	1
5. 女性のいるべき場所は家庭で、男性のいるべき場所は職場である	5	4	3	2	1
6. 主婦が仕事をすると、家族の負担が重くなるのでよくない	5	4	3	2	1
7. 結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してもよい	5	4	3	2	1
8. 家事は男女の共同作業となるべきである	5	4	3	2	1
9. 子育ては女性にとって一番大切なキャリアである	5	4	3	2	1
10. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが大切である	5	4	3	2	1
11. 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである	5	4	3	2	1
12. 女性は家事や育児をしなければならぬから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい	5	4	3	2	1
13. 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をすることもそれと同じくらい重要である	5	4	3	2	1
14. 女性は子どもが生まれても、仕事を続けたほうがよい	5	4	3	2	1
15. 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい	5	4	3	2	1
16. 女性は責任の重い競争の激しい仕事はしないほうが良い	5	4	3	2	1

ここからは、子育てや家族に関するあなたのお考えを伺います
 13. 子育てに関連する以下の文章について、どう思いますか。[4そう思う]から[1そうは思わない]までの4段階のうち、あなたが当てはまる番号1つを選んで○をつけてください。

	4 そう思う	3 ややそう思う	2 あまりそう思わない	1 そうは思わない
1. 母親は、子どものために自分の個性や生き方を犠牲にするのは当然である	4	3	2	1
2. 父親は、子どものために自分の個性や生き方を犠牲にするのは当然である	4	3	2	1
3. 女性には、親になっても子育てとは別の自分だけの目標を持つべきである	4	3	2	1
4. 男性は、親になっても子育てとは別の自分だけの目標を持つべきである	4	3	2	1
5. 子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たずに家にいるのが望ましい	4	3	2	1
6. 子育てをすることにより、自分の自由な時間が減ってもかまわない	4	3	2	1
7. 子育てにはお金がかかるが、やむをえない	4	3	2	1
8. 子育てには肉体的負担が大きい	4	3	2	1
9. 子育てには心理的・肉体的負担が大きい	4	3	2	1
10. 子育てでの大変さを、配偶者など周りの人にわかってもらえないのは問題だ	4	3	2	1
11. 子育てには息抜きやリフレッシュが必要である	4	3	2	1
12. 子育ては楽しい	4	3	2	1
13. 子育てでは自分を成長させることが出来る	4	3	2	1
14. 子どもを見ているとおもしろい	4	3	2	1
15. 私は、人づきあいが得意である	4	3	2	1
16. 人は、社会の中で助け合って生きていくことが望ましい	4	3	2	1
17. 仕事と、子育てなどの家庭生活を両立させることは大切である	4	3	2	1
18. 夫婦は子どもを持つてはじめて社会的に認められる	4	3	2	1
19. 子育てで次の社会をにぎう世代をつくりたい	4	3	2	1
20. 自分の次の世代には、より幸福な生活を送ってほしい	4	3	2	1

14. 子どもの存在に関する次のような意見について、あなたはどのように思いますか。[4そう思う]から[1そうは思わない]の4段階のうち、あなたが当てはまる番号1つを選んで○をつけてください。

	4 そう思う	3 ややそう思う	2 あまりそう思わない	1 そうは思わない
1. 家庭に明るさや活気を与えてくれる	4	3	2	1
2. 喜びや生きがいを与えてくれる	4	3	2	1
3. 心に安らぎや充実感を与えてくれる	4	3	2	1
4. かけがえのない	4	3	2	1
5. 夫婦の絆となる	4	3	2	1
6. 自分の生命を伝える	4	3	2	1
7. 姓や家を継ぐ	4	3	2	1
8. 一家の働き手として必要	4	3	2	1
9. 自分の夢や志を託す後継者	4	3	2	1
10. 老後の面倒を見てもらう	4	3	2	1

17. 次の設問では、いろいろな経験や性質、好みなどについての文章をあげていきます。それぞれの文章にどの程度当てはまるかを考えて「4とてもよくあてはまる」から「0全くあてはまらない」までの5段階のうち、あなたが最もよく当てはまるところの数字を選んで○をつけてください。あまり考え込まずに、最初に思ったとおりをお答えください。

	てはまる	4	3	2	1	0
1 私は、自分が何になりたいのかをはっきりと考えている	4	3	2	1	0	
2 私は、自分が混乱しているように感じている	4	3	2	1	0	
3 私は、自分がどんな人間であるのかをよく知っている	4	3	2	1	0	
4 私は、自分の人生をどのように生きたいかを自分で決められない	4	3	2	1	0	
5 私は、自分のしていることを本当はわかっていない	4	3	2	1	0	
6 私は、自分が好きだし、自分に誇りをもっている	4	3	2	1	0	
7 私には、充実感がない	4	3	2	1	0	
8 誰かに個人的な話をされると、私は当惑してしまう	4	3	2	1	0	
9 私は、特定のひとと深いつきあいができる	4	3	2	1	0	
10 私は、あたたかく親切な人間である	4	3	2	1	0	
11 私は、もともと1人ぼっちである	4	3	2	1	0	
12 私は、他の人たちと親密な関係を持っている	4	3	2	1	0	
13 私は、他の人よりも目立つのを好まない	4	3	2	1	0	
14 私は、他の人たちとなかなか親しくなれない	4	3	2	1	0	
15 私は、後輩や部下のめんどろをよよく見る	4	3	2	1	0	
16 私は、将来に残すことのできる業績をあげつつある	4	3	2	1	0	
17 私は、よい親である(親になる)自信がある	4	3	2	1	0	
18 私は、後輩や部下を指導するのが苦手である	4	3	2	1	0	
19 私は、自分を甘やかすところがある	4	3	2	1	0	
20 私は、親であること(親になること)が不安である	4	3	2	1	0	
21 私は、未来を担う子どもたちを育てていきたいと思う	4	3	2	1	0	

ここからは、あなた自身のことを伺います
 16. あなたにとって、次のような性質はどの程度重要だと思いますか。[6非常に重要]から[0まったく重要でない]のうち、1つ選んで○をつけてください。

	6	5	4	3	2	1	0
1. 指導力のある	6	5	4	3	2	1	0
2. 大胆な	6	5	4	3	2	1	0
3. 決断力のある	6	5	4	3	2	1	0
4. かわいしい	6	5	4	3	2	1	0
5. 行動力のある	6	5	4	3	2	1	0
6. 信念を持った	6	5	4	3	2	1	0
7. 優雅な	6	5	4	3	2	1	0
8. 頼りがいのある	6	5	4	3	2	1	0
9. 色気のある	6	5	4	3	2	1	0
10. 言葉使いのいい	6	5	4	3	2	1	0
11. 静かな	6	5	4	3	2	1	0
12. たくましい	6	5	4	3	2	1	0
13. 自己主張のできる	6	5	4	3	2	1	0
14. 繊細な	6	5	4	3	2	1	0
15. 冒険心に富んだ	6	5	4	3	2	1	0
16. 従順な	6	5	4	3	2	1	0
17. 意志の強い	6	5	4	3	2	1	0
18. 愛嬌のある	6	5	4	3	2	1	0
19. 献身的な	6	5	4	3	2	1	0
20. おしやれな	6	5	4	3	2	1	0

18. 以下は特定の行為のリストです。最近(過去2ヶ月間位の間に)、それぞれの行為をどれくらい行ったかを0~2の中から1つ選んでOをつけてください。

0: 1度も行わなかった、1: 1回行った、2: 2回以上行った

1. 自分のもっている技術を誰かに教えた。…………… 0—1—2
2. 年下の人の手本となるようなことをした。…………… 0—1—2
3. 誰かの個人的な話に耳を傾けた…………… 0—1—2
4. 誰かに善悪について教えた。…………… 0—1—2
5. 誰かに、自分の幼い頃の話をした。…………… 0—1—2
6. 自分の家族以外の誰かの子どもの世話をした。…………… 0—1—2
7. リーダー的な立場に選ばれた。…………… 0—1—2
8. 家族以外のグループのために計画を立てた。…………… 0—1—2
9. 誰かのために、なにかを作った…………… 0—1—2
10. 友人や知り合いの手伝いをした(修理や引っ越しなど) …… 0—1—2
11. 趣味で、植物を植えたり、世話をした…………… 0—1—2
12. 家や家具などで壊れたものを修理した…………… 0—1—2
13. 誰かの応急処置や看病をした。…………… 0—1—2
14. 新しい技術(言語、楽器、機械操作など)を学んだ。…………… 0—1—2
15. 過去の経験を生かして、誰かに助言した。…………… 0—1—2

ここからは、「大人」ということについて伺います。

19. あなたは、「1人前の大人になる」とはどういうことだと思いますか。つぎの各項目についてどれくらい重要と考えるか、[4重要である] ~ [1重要でない]のうち一つを選んでOをつけてください。

4. 重要である 3. まあ重要である 2. あまり重要でない 1. 重要でない
1. 責任ある行動がとれる…………… 4—3—2—1
2. 経済的に親の世話にならない…………… 4—3—2—1
3. 社会的常識が身につく…………… 4—3—2—1
4. 社会に貢献する…………… 4—3—2—1
5. 親から精神的に自立する…………… 4—3—2—1
6. 家族ができる(結婚する・子どもが産まれる)…………… 4—3—2—1
7. 受容・寛容・我慢強さを身につける…………… 4—3—2—1
8. 自分以外の人を経済的に養うことができる…………… 4—3—2—1
9. 税金を納める…………… 4—3—2—1
10. 人と調和してやっつけていける…………… 4—3—2—1
11. 自分を客観的に見られる…………… 4—3—2—1
12. 判断力・決断力がつく…………… 4—3—2—1
13. 自分より年下の人の面倒をみる…………… 4—3—2—1
14. 周りの人を気遣い、世話をやく…………… 4—3—2—1

20. 「未熟な大人が増えてきている」と言われることがありますか、原因は何だと思いますか。あなたがもっとも重大と思うことを1つだけ選んでOをつけてください。

1. 親が、青年期以降の子どものを、大人として扱わないからである。
2. 親元を離れて生活できず社会基盤(仕事や住まい)がないからである。
3. 親者が、大人になりたがりたくないと思っているからである。
4. 大人になるとはどういうことかのイメージが備わっていないからである。
5. 人間関係が希薄になり、社会性などが育たないからである。
6. 家庭の教育機能が低下しているからである。
7. 学校教育の中で、人格形成がされにくいからである
8. その他()
9. 未熟な大人が増えていいるとは思わない

21. 現在、あなたのお父さんは、あなたをどれくらい大人として扱ってくれますか。あてはまる番号を1つ選んでOをつけてください。お父さんがいらっしゃる場合、4にOをつけてください。

1. いつも大人扱い 2. 時々大人扱い 3. まだ大人として扱ってくれない 4. 非該当

22. 現在、あなたのお母さんは、あなたをどれくらい大人として扱ってくれますか。あてはまる番号を1つ選んでOをつけてください。お母さんがいらっしゃる場合、4にOをつけてください。

1. いつも大人扱い 2. 時々大人扱い 3. まだ大人として扱ってくれない 4. 非該当

23. 現在、あなたは「自分は大人になった」と感じることはありませんか。あなたがどれくらいおとなに近づいているか自己評価の大人度を、0~100%で表してみてください。

現在のあなたの大人度は? () %

24. 日本国憲法の改正手続に関する法律(略称: 国民投票法)によって、18歳以上が法的に大人である」と認められようとしています。あなたは、このことをどうお考えですか。1つ選んでください。

1. 適切だと思う
2. 適切ではないと思う
3. わからない

あなたのご両親について伺います

25. あなたのお父さんは、あなたが幼児や小学生の頃どのようなことをしてくれましたか。次の各項目について、[4よくしてくれた]から[1まったくしてくれなかった]のうち当てはまる番号を1つずつ、選んでOをつけてください。お父さんがいなかった場合は、次の質問に進んでください。

4. よくしてくれた 3. 時々してくれた 2. たまにしてくれた 1. まったくしてくれなかった
1. 私と遊んでくれた…………… 4—3—2—1
2. その日の出来事について私の話を聞いてくれた…………… 4—3—2—1
3. いろいろな所へつれて行ってくれた…………… 4—3—2—1
4. 私を抱いたり、ひざの上に乗せたり、ほおずりをしたりしてくれた…………… 4—3—2—1
5. 自分の子どもの頃のことや昔の思い出について話してくれた…………… 4—3—2—1
6. 運動会や学芸会など学校の行事に来てくれた…………… 4—3—2—1
7. 誕生日やクリスマスなどのお祝いをしてくれた…………… 4—3—2—1

